機密

會計答議

一

114
A2273
2

宮内省図書寮

ト性質ヲ殊ニスル子数料及公権収入ト
ハ何々ナル子ロスレル、モスセ西氏

二普國憲法百四條豫算超過ノ場合ハ英國ノ解
責法ト同一ノ解釈ヲナスヘキ子仝上

三豫算ノ科目ノ目的ノ外ノ支用ノ件

四地方費ヲ定ムルニ法律ヲ以テスルヿヲ憲法
ニ掲クヘキ子

五大藏大臣ハ租税ヲ免除スルノ権アリ子

六紙幣ハ國債ト同視スヘキ子并豫算超過トハ

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

科目外ノ支出ヲモ包含スル乎

七條約ニ依テ生スル義務ノ金額ハ國債ト同ク法律上國民ノ義務トナリ議院ノ議ヲ容レザルヘキ乎ロスレルモスセル民

八條約ニ依テ生スル義務ヲ補給スル為ニ議會ハ租稅ヲ拒ムノ權ナシト云コトヲ浮ル乎

九普國憲法危急命令ノ場合ハ財政ニモ適用スヘキ乎

以上

問

手數料及公權扱入ノ事ハ過日既ニ答示ヲ得タリ但シ現在帝國ニテ租稅ノ外トシテ取立ツル手數料(クツツ)ハ何々ナルヤ

又憲法第百二條ニ依リ租稅ト同シク國會ノ議ヲ經テ取立ツル手數料ハ何々ナル乎

又政府ノ公權(レガリエン)上ノ扱入トシテ國會ノ議ヲ經ザル專獨特權ハ何々ナル乎

右貴下ノ條列シテ指教セラレンコトヲ求ム

井上

ロスレル君

答

右ノ問題ニ答フルコト左ノ如シ

第一問ニ答フ　李漏生國ニ現行スル手数料ニ二種アリ

第一　本来ノ手数料即チ狭義ノ手数料ニシテ「スポルテルン」ト称スルモノ是ナリ之ニ属スルモノハ

一　裁判費用争訟裁判費用及争訟ニアラザル裁判取扱ノ費用

二　行政手数料行政官衙ニ於テ人民ノ為取扱ヒタル事務ノ費用

第二　准手数料即チ政府ノ施設物ヲ利用ス

ルモノヨリ収ムル所ノ賠償（鐵道運賃、郵便料、
学校費、貨幣鑄造料、道路費及入港料等）
第二問ニ答フ
帝國憲法第百二條ハ單ニ本
来ノ手数料ニ関係ヲ有スルノミ即チ裁判費用
ト行政手数料ノ二ヲ指スノミ而シテ其金額ハ
之ヲ國庫ニ収ムルト俸給ノ一部トシテ当該官
吏ノ手ニ収ムルトノ別アルモ之ヲ問ハス然ル
ニ右ノ原則ハ行政手数料ニ對シテ未タ充分ニ
踐行セラレサルモノヽ如シ蓋シ此手数料ノ徴
収ハ高等官衙ニ於ニハ千八百二十五年四月二
十五日ノ勅令ニ依據シ下等官署ニ於テハ閣
省令ニ由テ之ヲ実行スレハナリ但シ近時ハ千八
百六十八年二月二十七日ノ法律ニ依リ何レノ
手数料ヲ自今引續キテ徴収スヘキヤ何レヲ自
今廃止スヘキヤヲ定メタリ
第三問ニ答フ
帝國ニ於テ准手数料即チ政
府ノ特有權施用ヨリ生スル収入ニシテ賦課金
ノ性質ヲ有スルモノハ憲法第百條ニ從ヒ法律
ニ依ルニアラサレハ之ヲ定ムルコト能ハスト
雖モ其賦課金ノ性質ヲ帶ヒサルモノハ議院ノ

承認ヲ俟ツヲ要セズ

此賦課金トハ特別ノ意義アルモノニシテ之ヲ明定スルカト基ク難ト雖然レ共人民ヨリ政府ニ納ムル金ニシテ本来ノ租税ニモ本来ノ手数料ニモ属セサルモノハ即チ此賦課金ト解釈シテ可ナルベシ語ヲ更ヘテ言ヘハ此賦課金ハ官ノ手数ニ對スル單純ノ報酬ニアラスシテ之ヲ徴収スルニモ

尓収税ノ原則ニ依ルヲ要セサルモノトス隨テ納税能力ノ程度及豫メ施行スル評定ニ基キテ賦課徴収スルモノニアラス

此賦課金ニ属スルモノハ例之ハ専賣特許料、航海料、河川、運河及道路通行料、木材押流料ノ如キモノニシテ其額ハ單純ノ報酬額ヲ超エルモノ是ナリ

故ニ法律ノ規定外ニ在ル手数料ハ全トシテ貨幣鑄造料、鐵道運賃、郵便料、水先案内料、入港料燈臺料、倉庫料等是ナリ

然レ共上記ノ原則ハ各國ニ於テ厳ニ之ヲ遵守スルニアラス即チ一方ニ於テハ單純ノ行政令ヲ以テ道路、河川及港灣ニ関スル賦課金(ツングーベン)ヲ確定

シ其額ヲ費用ノ償ハレ得ルニ止ル者ハ單純ノ報酬ノミニ止メ一方ニ於テハ賦課金ノ性質ヲ帶ヒサル手數料例令ヘハ貨幣鑄造料、郵便料ノ如キモノヲ法律ニ依リテ確定シタル前段ノ場合ハ古來ノ慣例ニ由リテ然ルモノナルヘシト雖モ其果シテ憲法ニ抵觸セサルヤノ疑ヒアリ後段ノ場合ハ商業上重大ノ關係アルカ為メ法律ニ依ルモノナリ

之ヲ要スルニ個々ノ例外ヲ除キ凡ソ租稅若クハ租稅ニ類スル賦課金若クハ本來ノ手數料ノ性質ヲ帶ヒサルモノハ代議院ノ承認ヲ要セストノ原則ハ今ニシテ之ヲ確定セサルヘカラス

十八百八十七年十一月二十五日

ハーバート、リヨースレル記

法律ニ依ル者

一 租税

二 手数料 ヌポルテルン タキヌ

裁判費

行政手数料

三 准手数料

鐵道賃

郵便料

学校費

貨幣鑄造費

道路費

入港料

此ノ賦課金ノ性質ヲ有スル者ハ專賣、
特許料、航海料、河渠道路料、水利料及
ノ如キハ法律ニ依ルヘシ
又賦課金ニ非サル貨幣鑄造料、鐵道使郵
便料、水先案内料、入港料、燈臺料、倉庫料
等ハ法律ニ依ルヲ要セス
但シ帝國ニ入リ道路、河渠、海港ノ賦金ニ於テ
政令ニ定メタリ又貨幣鑄造料、郵便
料ヲ法律ニ定メタリ比例ニ依ル上及
說ノ事件ハ尚其上重大ノ關係アルヲ為
メリ

答

帝國憲法第百二條ニ關スル意見

(一) 帝國憲法第百二條ノ意義ハ手數料ハ法律
ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ徵收スルヲ得サル
ニ在ラス政府若ハ町村ノ官吏ハ法律ニ以テス
ルニ非サレハ手數料ヲ徵收スルヲ得サルニ在
リ蓋本條ノ意義ハ國庫ノ為メニスル租稅及雜
稅ハ歲計豫算ニ掲載スルカ又ハ特別ノ法律ヲ
以テ定ムル場合ニ非サレハ之ヲ徵收スルヲ許
サスト曰ヘル第百條ト對照スルトキハ自判然

スヘシ

第百二條ニ於テハ正條ノ法文既ニ明瞭ナル如ク國庫ニ收入スル手數料ヲ掲ケタルノ意ニ非ス官吏政府ノ職務ヲ行フタルカ為ニ徴收スヘク而シテ其收納ノ一部トナル所ノ手數料ヲ謂フナリ斯ノ如キ手數料ハ中古ノ末期獨逸國ニ於テハ裁判費ト称シ專ラ裁判所ニ行ハレ其後ハ或ル行政上ノ執務ニ對シテモ亦之ヲ徴收シ當該官吏ノ收納ノ一部ヲ成シ其勞務ニ對スル報酬ト見做サルヽニ至リタリ然レトモ官吏一定ノ俸給ヲ受ルノ例規ヲ設ケタルノ後ハ手數料ハ常ニ國庫ニ收入スルヲ例トス而シテ斯ノ沿革ヲ經テ当世期ニ至リ遂ニ其局ヲ結ヒタルノ今日ニ於テモ尚義務ノ為メ手數料ヲ受ルノ例外ナキニ非ス即第百二條ノ如キハ法律ニ依レル場合ニ於テノミ斯ノ如キ手數料ノ徴收ヲ許シタルモノニシテ此規定ニ関シテハ茲ニ之カ理由ヲ論究スルヲ要セス

又法律ヲ以テスルニ非サレハ國庫ノ為手數料ヲ徴收スルヲ許サヽルヤノ問題ハ第百條ニ依

テ利定スヘク而シテ雑税ナル語ノ廣汎ナル意義中ニハ手数料ヲ包含スヘシ

(二) 今國庫ノ為手数料ヲ徴收スルニハ議院ノ承認ヲ経ルヲ正当ナリトスヘキヤノ問題ニ関シテハ先ツ手数料ノ意義ヲ講究セサルヘカラス

蓋手数料ノ意義ニ関シテハ学説上ニ於テ説ク所未タ一定セスト雖此意義ヲ定ムルニハ一ニハ手数料ト租税ノ區別ヲ判明ニシ又一ニハ政府ノ一私人ノ資格ニ於ケル経済上ノ收得ト手数料ノ區別ヲ分タサルヘカラス

手数料ト租税ノ區別ハ本問題ニ関シ特ニ之ヲ論述スルヲ要セス何トナレハ俗ニ雑税ハ純粋ノ租税又ハ手数料ノ性質ヲ具フルト否トニ拘ラス必ス法律ニ依テ徴收スヘシハナリ而シテ此原則タル租税ニ在テハ一般ノ是認ヲ経タル所ニシテ手数料ニ至テモ亦租税ニ於ケルト同一ノ理由ヨリシテ之ヲ適用スルヲ得ヘシ蓋手数料ハ歳計豫算ニ於テ租税ノ部ニ掲クルノミナラス又均シク政府ノ支出ニ充ツル為一定

ヲ固定額ヲ成セリ但一個ノ利益ノ為ニ政府ヲ煩シ若クハ特別ノ事務ヲ行ハシムル者ニ對シ之ヲ徴収スルハ権宜上ノ理由ヨリ生スル者ナリ故ニ手数料ハ其実特徴税ニ外ナラス之ヲ詳言スレハ專ラ一定ノ義務者ニ對シ一般普通ノ標準ニ依ラス其人ノ為ニ生シタル特別ノ費用若ハ其人ノ得タル利益ニ準據シテ徴收スル所ノ租税ナリ加之之ヲ財政ノ実際ニ徴スルニテ手数料ハ其額義務者ノ請求シタル政府ノ執務費ノ外ニ出ツルノミナラス又其執務ノ経済上ノ

価直ニ超過スルコト往々之アリ而シテ此場合ニ於テハ純然タル租税ト區別スル所ナリ又義務者ノ資力ニ準シテ其額ヲ定ムルヲ得ヘク而シテ実際屢〻斯ノ如クスルハ更ニ租税ニ異ナルモノナケレハナリ蓋國法上ノ本問題ニ関シ手数料ヲ以テ租税ト同一視スルノ正当ナルハ以上ノ理由ヨリ然ルモノニシテ其他諸般ノ政治上ノ理由ヲ論辯スルヲ要セサルナリ

(三) 然レトモ政府ハ私人ノ資格ヲ以テスル事業ニ於テノ明約ト默約(往々之アリ)トヲ問ハス一

私人トノ契約ニ從ヒ徴收スル所ノ額ニ関シテハ別論ナリ蓋此場合ニ於テ行政ハ法律ニ背反セサル限リハ各個ニ對スルト一般ニ於テスルトヲ論セス其煩労ニ準スル報酬ニ関シ更ニ議院ノ承認ヲ經ルヲ要セス一私人ト協議ノ上若ハ專斷ノ賃錢表等ヲ以テ其額ヲ定ムルヲ得ヘシ是レ殊ニ政府ノ運輸事業ニ在テ行ハル、所ニシテ手数料ナル語ヲ用ヰルハ誤レルモノト謂フヘシ然レトモ運輸事業ノ他日漸ク進歩スルニ於テハ公法上ノ事業ニ変性シ而シテ政府ト其事業ヲ使用スル者トノ関係ハ既ニ契約ヲ以テ論スヘカラサルニ至ルヘク隨テ一私人ノ報酬ハ変シテ手数料ノ性質ヲ帶ルニ至ルヘク二三ノ國ニ於テ既ニ斯ノ如キ進歩ヲ為スノ傾向アルニ拘ラスモタ其結局ニ至ラサル間政府ハ專ラ運輸事業者トシテ一私人ニ對立シ両者ノ関係亦民法上ノ區域内ニ止マルヲ故ニ一私人ノ報酬ハ假令ヒ政府一方ニ於テ其額ヲ定ムルモ仍民法上ノモノニシテ以上論述シタル租税類似ノ手数料ノ公法上性質ヲ具ヘサルモノト

スヽヲ要スルニ一私人ノ報酬ハ学國憲法第百
條ニ曰フ所ノ雜稅ニ非サルカ故ニ此理由ヨリ
見ルモ又國法上一般ノ主義ヨリ論スルモ法律
ヲ以テ制定スルヲ要セサルナリ而シテ此原則
ハ政府ノ一私人タル資格ヲ以テスル事業外ニ
出テザル限ハ郵便電信料傳信料鐵道料ハ勿論
其他政府ノ事業及營造物ニ關シテ行ハル、所
ナリ故ニ法律上ヨリ論スルトキハ政府ノ郵便
事業ノ大部ニ於ケル如ク法律ニ依リ一私人ノ
競爭ヲ禁スル場合ト雖ト數料ナル語ヲ用ヰ

ルヲ得ス（茲ニ注意スヘキハ政府ノ郵便專有權
ト租稅專有權トヲ混同スヘカラサルコト是ナ
リ租稅專有權ハ租稅ノ徵收方法ヲ表示スルニ
止マルモノナルカ故ニ法律ヲ以テ制定スヘキ
ナリ）然レトモ政治上ヨリ觀ルトキハ行
政ニ於テ財政ノ目的ニ拘泥シ濫リニ專有權ヲ
利用シ以テ一般交通ノ利益ヲ害セサラシメン
カ為ニ法律ニ賃錢ヲ明揭スルハ大ニ理由アル
モノニシテ即獨逸國ノ如キハ茲ニ見ル所アリ
テ重要ナル賃錢ノ定率ヲ法律ニ讓リタルハ其

一例ナリ但斯ノ如クスヘキ國法上ノ必要ナキハ帝國憲法第百條及國法上一般ノ主義ヨリシテ判然スヘキノミ

モツセ再拜

問

普國憲法六十三條ニ於テ事後ノ承認ヲ要スルハ英國ノ所謂「ビル、オフ、イムデムニチー」ノ種類ナリトスルヿヲ得ヘキカ如シ

然ルニ第百四條第一項ニ於テ支出豫算ヲ超ルノ場合ニ於テモ亦同樣ノ例ヲ取リタリ

折精確ナル豫算ハ実際上ニ往々其不足アルヲ免ルヽヿト能ハズ而シテ超過支出ハ法律ノ禁スル所ニ非サルナリ(グナイスト氏博士ノ説ニ據ル)果シテ然ラハ第百四條ハ第六十三條ト全

シリ「ビル、オフ、イムデムニチー」ノ類トシテ解釈スヘカラザルカ

二十一年一月上旬

答

英國法ニ依レハ「ビル、オフ、インデムニチー」(責任解除法)ハ樣式上及事實上共ニ純然タル法律ニシテ或ル違法ノ行ヲ爲シタル者ヲ其責ニ當ラシムヘカラサルヿヲ明言スル所ノモノナリ而シテ此責任解除ハ違法ノ命令ヲ發シ若クハ處分ヲ施シタル大臣ハ勿論又違法ノ命令若クハ處分ヲ執行シタル其他ノ人ニ関スルモノニシテ大臣ノ單ニ議院ニ對スル責ヲ解キ以テ彈劾ノ危険ヲ免レシムルノミナラス又併セテ裁判

所ニ於ケル通常ノ責ヲ解キ裁判所ハ之ニ依テ
彼ノ行為ノ違法ナルニ對シ通例ノ法律ヲ以テ
論スヘカラサルノ訓令ヲ受ルモノトス英國ノ
裁判官ハ法律若クハ違法ノ命令ニ依テ判決ヲ
下スヲ例トシ違法ノ命令若クハ行為ハ假令ヒ
執行權ノ指揮ニ出ルニモセヨ責任解除法アル
ニ非サレハ之ヲ認メサルナリ蓋責任解除法ヲ
發スル所以ノモノハ議院此ノ如キ違法ノ處置
ヲ認メテ以テ実際上必要若クハ便宜ナリトス
ルノ故ニ在ルノミナラス又此事由ナキニ於テ
モ純然タル政治上ノ理由ヨリシテ大臣ノ地位
ヲ轉覆セシメサラントスルノ故ニ在ルナリ而
シテ英國ニ於テ故ラニ執行權ノ此ノ如キ臨時
ノ命令ヲシテ或ル制限ニ檢束セシムルノ法律
上規定ヲ設ケサルハ若シ此規定ヲ設ルニ於テ
ハ豫メ法律ヲ以テ之ニ適スル命令又ハ拘留等
ヲ委任スルカ如キ外觀ヲ呈示スルヲ防カンカ
為メナリ故ニ議院ハ責任解除法ヲ發スルト又
之ヲ拒否スルトニ付事実上及政治上ノ自由ヲ
具ヘ更ニ檢制セラルヽ所ナシ

獨逸國法ハ此事ニ関シ英國ト全ク其趣ヲ異ニス

(一)帝國憲法第六十三條ニ於ケルカ如クタルハ臨時ノ命令ヲ發スルヲ得ル要件ヲ豫定シ若シ果シテ此要件アルニ於テハ大臣ノ處置憲法ニ違スルモノニシテ議院ハ事後ノ承認ヲ拒否スルノ權ナシ蓋シリヨン子氏(帝國憲法論第百十七條)ハ歳計豫算超過ニ関シ此事ヲ明言スト雖モ予ノ見ル所ニ依レハ併セテ臨時ノ命令ニ之ヲ及ホサヽルノ理由アルヿナシ何トナレハ若シ然セサルニ於テハ特ニ事実上ノ要件ヲ規定スルノ精神ヲ失ヒ又上ニ論述シタルカ如ク英國ニ於テモ之ヲ必然ノ結果ト認メタレハナリ

(二)命令等ノ事後ノ承認若クハ拒否ハ特別ナル法律ノ體裁ヲ以テセス單ニ両院ノ決議ヲ以テシ加之其承認ヲ拒否センニハ又一院ノ決議ヲ以テシ而シテ之ヲ政府ニ通報スルノミ蓋シ此場合ノ如キハ両院若クハ一院ノ決議ニシテ既ニ法律上ノ効力ヲ有シ主權者ノ裁可ヲ要セサルナリ

(三)此ノ如キ決議ノ法律上効力タルハ承認ノ場合ニ於テ命令ハ始メテ永續スル法律トナリテ行ハルヽニ在リト雖拒否ノ場合ニ於テハ其説一定セス今或ル説ニ依リ命令ニシテ拒否ノ為メ即時自然ニ其効力ヲ失フヘキモノトセハ之ヲ憲法ニ明揭セサルヘカラス然ルニ臺國憲法ニ於ケルカ如ク其明文ナキ場合ニ在テモ論者ハ尚即時自然ニ無効ニ帰スルモノナリトス何トナレハ此命令ハ無効タルヿアルノ約束ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ發スルヲ得サレハナリト然レトモ此説ノ如キハ憑據ニ乏シキ空論ニ過キス予ハ寧ロ反對説ヲ正當ナルモノト認ム何トナレハ議院ノ決議ハ止ヲ政府ト議院ノ間ニ成立スルモノニシテ職務上裁判所及行政廳ノ與リ知ル所ニ非ス又自然ニ發布セラレタルモノナリトスルヿ能ハサレハナリ故ニ或ル論者ハ議院ノ決議ニ依リ政府ニ於テ正当ニ命令ヲ廢止セシヿヲ欲シ又或ル論者ハ少ナクモ議院ニ於テ命令ヲ拒否シタル為メ政府ハ之ヲ廢止スルノ公告ヲ發セシヿヲ望ム蓋シ國ニ於テ

ハ公告ノ方法ヲ用ユト雖実際上ノ効力ニ至テハ両者ノ間ニ差別アルコトナシ何トナレハ若シ政府此公告ヲ発セサルトキハ憲法第百六條ノ原則ニ依リ命令ハ常ニ存續スレハナリ之ヲ要スルニ此問題ノ立憲上ノ價値ハ議院ハ其決議ヲ以テ直接ニ主權ヲ行フノ権ヲ有セスト謂フニ在ルヲ以テ今ヤ政府ニシテ彼ノ公告ヲ發セサルトキハ命令ノ効力将来ニ向テ存立シ議院ハ政府ニ對シ怠慢ノ過ヲ問フヨリ他ニ方便ナカルヘキナリ

(四)承認ヲ拒否サレ後日命令ヲ廢止セサル場合ニ於ケル政府ノ責任ハ純然タル政治上ノ責ニシテ獨リ大臣ニ関シ而シテ裁判所及行政廳ニ延及セス又議院ニ對シテ之ヲ負擔スルモ裁判所ニ對シ併セテ擔任スルニハ非サルナリ此時ニ当リ大臣彈劾ノ法律ヲ設ケサル國ニ於テハ議院ハ君主ニ訴願ヲ提出スルノ一法アルノミ而シテ此責任ノ性質ハ最モ慎重シテ詳定スヘキナリトス蓋獨逸各邦ノ憲法ニ於ケルカ如ク特ニ危急命令ヲ發スル場合ノ事実上要件ヲ

規定シタル國ニ在テハ政府ハ此要件ニ從ヒ危急命令ヲ發布スルノ權ヲ有スルヿ判然タリ而シテ議院後日之ヲ承認スルモ此レ英國ノ所謂ル責任解除即元来違法ナル處置ノ承認ニ非ズシテ責任解除ノ拒否ヲ禁止スル所ノ適法ナル處置ノ承認ナリ（「ッヨプル」氏獨逸國法論第三百九十八條）然レトモ議院其承認ヲ拒否シタル場合ニ於テハ將来ノ處置ヲ放任スルノ黙許ヲ以テシ若クハ信任決議等ヲ為スノ明許ヲ以テ責任解除ヲ与フルヲ得ヘシ又ハ責任解除ヲ拒否シ以テ大臣ヲ彈劾シ若クハ君主ニ訴願スルヲ得ヘシト雖第二ノ方法ハ實際上ニ施行シ難ハサルヿ多キカ故ニ獨逸國ニ於ケル危急命令ノ承認拒否ノ結果ハ後日之ヲ廢止スルニ在ルヲ例トス

以上論究シタル重義ニ依レハ予ハ李國憲法第六十三條ニ於ケル議院ノ事後承認ハ責任解除法ノ性質ヲ具ヘサルモノト認ム其故ハ樣式上ヨリ論スルトキハ議院ノ決議ハ法律ニ非ス又事實上ヨリ見ルトキハ事後承認ハ政府ノ處置

ノ違法ヲ承認スルニ過ギスシテ違法ノ責任ヲ解除スルノ意ニ非サルカ故ナリ蓋責任解除ナル語ハ往々用ヰルヿナキニ非サルモ必ス違法ノ處置ノ承認若クハ認許ノ意義ニ外ナラス歳計豫算超過ニ関シテモ亦予ハ同一ノ主義ヲ適用スヘシト認ム蓋古國憲法第百四條ハ千八百七十二年三月二十七日ノ會計検査院法第十九條ニ於ケルカ如ク獨リ事後ノ承認ヲ要スルモノニシテ此承認ヤ総テノ許可ニ均シク因ヨリ豫算超過ノ法律上許スヘキモノヽニ関セサルヘカラス又事実上ヨリ観察スルモ豫算超過ハ豫算科目中ノ支出ニ在ルト科目外ノ支出ニ在ルトヲ問ハス実際避クヘカラサルモノナルカ故ニ直ニ違法ノ處置ナリト断定スルヲ得サルヤ判然タリ況シテ貴院ニ注意セラルヽ如ク精確ナル豫算ニ在テ尤屢見ル所ナルニ於テハ殊ニ然リトス是ヲ以テ議院ノ豫算超過ヲ承認スルハ第六十三條ノ場合ニ均シク其違法ヲ承認スルニ過キスシテ責任解除ヲ与フルニ非又之ニ反シ其承認ヲ拒否シタルトキハ議院ハ

異議ヲ述フルニ止メ將来ノ紀治ヲ拋棄シ以テ
責任ヲ解除スルヲ得ヘク又ハ責任解除ヲ拒否
シ以テ大臣ヲ彈劾シ若クハ君主ニ訴願スルヲ
得ヘシ而シテ第二ノ場合ニ於テハ大臣ハ違法
ノ支出額ヲ自辯スルノ義務アリト雖獨逸國ノ
原則ニ依ルトキハ彈劾ノ方便ヲ以テスルニ非
サレハ之カ弁償ヲ実行スルヲ得ス又佛國ノ如
キ法律ノ彈劾ヲ許シタルモノナキ國ニ於テハ
民事訴訟ノ手段亦絶テアルヿナシ蓋「リヨン子」
氏(佛國々法論第百十七條)ハ君主ニ於テ議院ノ

訴願ヲ裁可シタル場合ニ在テ民事訴訟ヲ許ス
ノ説ヲ為スト雖予ハ特別ノ法律アルニ非スシ
テ假令ヒ外觀上憲法違反ト認ムヘキモノニモ
セヨ大臣ノ職務上行為ニ関シ判決ヲ下スノ權
限ヲ以テ通常ノ裁判所ニ一任スルノ理由ヲ發
見スル能ハサルナリ

リヨースレル再拵

答

拙者カ答辯スヘキ問題ハ「インデムニテート」ナル語ノ意義ヲ確定スルニアリ

抑〻英國ノ國法ニ據ルニ「グナイスト」氏カ記述シタル如ク「ビル、オフ、インデムニチー」ナルモノハ一ノ法律ニシテ之ヲ以テ他ノ法律ヲ停止シ且ツ宰相及其他ノ官吏ノ法律ヲ遵行セサリシ者ニ對シ其責ヲ解クモノナリ

然ルニ大陸諸國ニ於テハ「インデムニテート」ノ意義ヲ更ニ擴充シタリ此ニ於テ「インデムニテ

ト」ナル語ハ各省大臣ノ施行スル政務中法律ニ違ヒタル各種ノ場合ヲ包括シ且ツ英國ノ例ニ異ナリ之ヲ法律ト看做サスシテ唯違法ノ處置ヲ認許スルニ止マル議院ノ單純ノ決議ト為シタリ

然リ而シテ孛國憲法第六十三条及第百四条第一項ニ明記スル所ノ「承認」ナル語ハ如何ト言フニ是レ前陳英國ノ「インデムニチー」ノ意義ヲ含マサルノミナラス亦大陸諸國ニ於テ擴充シタル「インデムニテート」トモ異ナレリ何トナレハ

右「承認」ノ一語ニシテ果シテ「インデムニテート」ト同意義ノモノナリトスルトキハ孛國政府カ憲法第六十三条ノ權利ヲ施行スルニ當リ又ハ豫算外ノ支出ヲ為スニ當リ必ス違法ノ處置ヲ為スモノト推測セサルヲ得サレハナリ然ルニ斯ノ如キ推測ノ不當ナルハ甚タ明カニシテ此ニ其不當ナル所以ヲ述フレハ憲法ハ一定ノ條件ヲ設ケテ政府ニ緊急公布ノ權ヲ認許スルモノナレハ政府カ法律ノ範圍内ニ於テ此憲法上ノ權ヲ施行スル間ハ未タ以テ違法ノ處置ト

ナラス此ト同シク豫算超過モ亦直チニ違法ノ
處置トナスヲ得ス何トナレハ豫算ハ一ノ計畫
案ニ過キサルモノナレハナリ今ヤラバンド氏
獨逸國法論第三卷第二第三百六十葉及獨逸近
時ノ國法學者ハ二三ノ輩ヲ除ク外皆豫算ノ本
義ヲ明カニシ彼ノ旧説ニ政府豫算外ノ支出ヲ
為セハ必ス違法ノ處置タルヲ免レストアル論
ヲ全ク誤謬ナリト認定シタリ是レ宜ニ其當ヲ
得ルモノト謂フヘシ蓋シ豫算ニ掲載セサリシ
経費若クハ豫算額ノ不足ナル費目ハ実際避ケ

得ヘカラサルモノニシテ何レノ豫算年度ニ於
テモ斯ル不時ノ費途若クハ差額ハ毎ニ之ヲ算
外ニ置クヲ例トス何トナレハ其費途ノ必要又
ハ多額ノ支出ハ之ヲ豫知スヘカラサレハナリ
故ニ政府ハ必要ノ費途アルニ当リ其法律ニ因
由スル場合ト國ノ安危ニ係ル場合トニ於テ豫
算外ノ支出ヲ為スニ妨ケナキノミナラス斯ル
場合ニ臨ミ政府若シ其支出ヲ為サヽルトキハ
自ラ其義務ヲ損スルニ至ルヘシ抑〻代議院ハ一
切ノ歳出即チ豫算外ノ支出ヲモ合セテ之ヲ審

査シ承認スルノ權ヲ有スト雖モ其權ハ豫算確
定ノ爲ニ有スル所ノ權ト相異ナルコトナシ語
ヲ更ヘテ言ヘハ豫算ノ承認モ決算ノ審査モ共
ニ隨意ノ酌量ニアラス法律上若クハ事實上必
要トナシ若クハ正當トナス所ノ歳出ナレハ代
議院ハ豫算ニアレ決算ニアレ其承認ヲ拒ムコ
トヲ得ス故ニ法律ニ豫算外ノ支出ハ代議院ノ
承認ヲ要ストノ明文アルトキハ政府ハ代議院
ニ對シテ其支出ノ理由ヲ證明セサルヘカラサ
ルハ勿論ナレ𪜈其支出果シテ法律ノ実施ニ或

ハ現在ノ施設ノ維持ニ或ハ公安ノ維持ニ緊要
ナリシトノ證明アル以上ハ代議院ハ当初ノ豫
算ニ其支出ヲ掲ケタル場合ノ如ク憲法上其承
認ヲ拒ムコトヲ得ス而シテ其承認ハ追加豫算
ノ式ニ依ルヤ又ハ単純ノ決議ヲ以テ之ヲ爲ス
ヤハ本論ニ對シテ差別ナシトス
是故ニ憲法第六十三条若クハ第百四条ノ場合
ニ於テ政府若シ議院ノ承認ヲ求ムルトキハ政
府ハ之ヲ以テ違法ノ處置ヲ爲シタリトセン乎
決シテ然ラス政府ハ議院ニ向テ法律上ノ所爲

ノ認可ヲ求ムルニ外ナラス第六十三条ノ場合ニ於テハ其處置ノ法律ニ違ハサルコト別ニ疑ヲ容ルヘキ所ナク第百四条ノ場合ニ於テハ若シ法律ト豫算トノ別ヲ知ルトキハ其處置ヲ承認セサルヲ得サルノ理自ラ明ナルヘシ法律ト豫算トノ別ハ既ニ上文ノ述ヘタルカ如シ果シテ然リトセハ第百四条ノ場合ニ於テモ亦其承認ハ「インデムニテー」ノ意義ヲ有セサル点ニ関シテ決シテ疑ヲ容レサルヘシ

然レ𪜈第六十三条又ハ第百四條ノ場合ニ於テ後認ヲ求ムルノ政府ニシテ其法律若クハ憲法ニ依テ附與セラレタル權限ヲ踰越シタリト自認スルトキ例之ハ李國政府カ千八百六十二年乃至六十五年間ニ豫算ナクシテ支出シタル経費ヲ法律上ノ根據トキモノト政府自ラ認メタルカ如キ場合ニ於テハ其承認ハ則チ始メテ「インデムニテー」ノ性質ヲ帶ルニ至ルヘシ故ニ政府カ所謂緊急ヲ要シ又ハ豫算外ノ支出ヲ為シタルトキ其場合ノ如何ニ問ハス都ヘテ之ヲ違法ノ處置ト看做シ之ニ承認ニ与フルニ「イ

ンデムニテー上ノ理義ヲ以テセントスルノ説ハ抑誤謬ト謂ハサルヲ得ス如何ナル場合ニ於テモ政府ハ議院ノ承認ヲ得レハ其事ニ関ル責任ヲ解クノ利益ヲ受クヘク而シテ其責任ヲ解ク所以ノモノハ代議院カ其事件ヲ法律ニ適シタルモノト認ムルノ故ニアリ代議院カ違法ノ處置ヲ容認スルノ故ヲ以テ其責任ヲ解クニアラス

上記ノ理由ハ政治上重大ノ関係ヲ有スルコト別ニ喋々ヲ要セスシテ明カナリ今若シ憲法ニ緊急会議布ノ權ヲ掲クルコトナレハ予ハ右ノ理由ニ依リ「ビルオフ、インデムニテー」又ハ之ニ類スル語ヲ以テ代議院ノ承認ヲ解釈スルノ誤謬ヲ豫防センコトヲ欲ス斯ル語句ハ殊ニ豫算外ノ支出ニ関シテ甚タ危険ナルモノトス

千八百八十八年二月　東京ニ於テ

モスセ拝

問

代議院ニ於テ議決シタル豫算ノ各費目ハ其目的ノ外ニ支用スルヿヲ得ストハ各國ノ會計法ニ於テ之ヲ認ムル所ナリ、而シテ其目的外トハ如何ト問フニ代議院カ議定シタル項(タイテン)ノ金額ヲ他ノ某ノ費途ニ充用スヘカラサルコトヲ云フヲ乎、其項以下ノ細目ハ初メ豫算案ヲ代議院ニ提出スルノ際參考ノ為ノ支出豫算委員ニ知ラシメ且ツ該院ハ此參考書ヲ基トシテ款項ノ費額ヲ議定スルニモセヨ行政官ハ議定ノ「タイトル」

ノ金額ヲ超過セサル限ハ其細目ニ係ル費途ハ自由ニ之ヲ流用シ得ルヤ、又ハ參考書ニ在ル細目ハ議定ノ目的ナレハ其細目ニ違フタルトキハ即チ「タイトル」ノ目的外ニ出タルモノナルヤ」

例ヘハ砲臺一個ヲ建築スル為メ其經費ヲ百万圓ト豫算シ代議院之ヲ議定シタリト假定シ行政官之ヲ實施スルニ當リ七十万圓ヲ以テ該砲臺ヲ竣功シ殘金三十万圓アルニ依リ之ヲ以テ更ニ一ノ砲臺ヲ建築シタルトキ行政官ハ議院ノ議決ノ外ニ出タルト云フヲ得ヘキ乎

又大砲十門此經費拾万圓ト豫算ニ議定シアル行政官ハ七万圓ヲ以テ大砲十門ヲ作リ得タルニ依リ殘三万圓ヲ以テ仍五門ヲ新調シタリ是レ又議院ノ議決ノ外ニ出タリト云フヲ得ヘキ乎

又堤防十里ノ新築費拾万圓ト豫算ニ議定シアルモ行政官ハ右十里ノ堤防ヲ八万圓ニテ新築シ殘金二万圓ヲ以テ更ニ其連續ノ堤防二里ヲ新築シタルトキハ目的外ノ經費ヲ支出シタリト云フ乎

又前記ノ堤防ノ經費ハ豫算ノ如ク十万四ヲ支出シタルモ其工事ハ僅カニ九里ヲ竣功シタルトキハ議院ノ議決ニ乖クモノトスヘキ乎

答

此問題ハ各國ニ於テ憲法上又ハ法律上確定シタル原則ニ從ッテ之ヲ判断セサルヘカラス」

曩一學國ニ於テハ千八百七十二年三月廿四日ノ法律第十九條ニ定テ曰ク「凡ソ歳計豫算ノ各款各項ニ逆ヒ又ハ議院ノ議決シタル明細豫算ノ各項ニ違ヒ増支出ヲ為シタルトキハ豫算ニ於テ流用ヲ許シタル各項即チ某項ノ支拂殘金ヲ以テ他項ノ支拂不足ヲ補ヒタル場合ヲ除クノ外都テ豫算超過ト見做スヘシト

此法律ニ於テ豫算ノ各項トハ代議院ニ於テ別
別ニ議決シタル所ノ費目ヲ云フナリ
予國ニ於テハ此法律ニ因リ政府ハ支出節減ヨ
リ生スル剩餘金ヲ自由ニ處分スルノ權利無ク
即チ斯ル剩餘金ハ之ヲ積ミ置キ翌年度ノ豫算
ニ於テ其收入部ニ組入レサルヘカラス此例外
ニアルモノハ一項ヨリ他項ニ流用ヲ許シタル
經費ニ限ルノミ故ニ流用ヲ許シタル經費ニ限
リ一項ノ剩餘金ヲ他項ノ增支出ニ充用スルヿ
ヲ得ルノミ

實問ニ列擧セラレタル例ハ本來ノ豫算超過ニ
非ラス何ントナレハ何レノ例ニ於テモ議院カ
豫算ニ於テ議定シタル金額ヲ超過シタルモノ
ニアラサレハナリ然レトモ萬一乃至萬三ノ場合
ニ於テハ支出ヲ節減シ其餘剩金ヲ豫算外ノ目
的ニ使用シタルモノナルヲ故ニ之ヲ予國ノ法
律ニ照シテ判斷スレハ豫算外ノ支出トヽ云ハサ
ルヲ得ス而シテ斯ル支出ハ前記ノ法律ニ從ヒ
議院ニ向ッテ事後ノ承認ヲ求メサルヘカラス
右ニ陳述シタル各項ハ明細豫算ノ各項ト見做

サ・ルヘカラス何シントナレハ其金額ハ一定ノ目的ニ供スルモノトシテ特ニ議院ノ承認ヲ得タルモノニシテ其目的モ亦豫算中ニ明カニ掲載セラレサルヘカラサルモノナリ此場合ニ於テハ他項ニ流用スルノ權利如何ニ関係ナシト雖何ントナレハ其増支出ハ他項ノ為メニナシタルモノニアラスシテ唯同一項ニ於テナシ然モ豫算ニ於テ明カニ議定シタル目的ノ外ニ出タルナレハナリ思フニ斯ル場合ハ議定金額外ノ經費ヲ支出シタルニアラサルノ故ヲ以テ國

ヨリ本来ノ豫算超過ト見做ス可ラスト雖モ豫算ニ於テ未タ曾テ豫期セサリシ所ノ支出ヲナシタルモノナリ故ニ之ヲ豫算外ノ支出ト見做シ普國ニ於テハ之レカ為メ議院ノ事後ノ承認ヲ要スル場合ナリトス

然ルニ我國ニ於テハ其事後ノ承認ニ関シ其増支出ハ果シテ必要ノモノナリシカ又ハ只有益ノモノナリシカヲ區別ス若シ必要ノ増支出ナルトキハ議院ハ必ス事後ノ承認ヲナスヘキ義務アリトス之ニ反シテ有益ノ増支出ナルトキ

ハ議院ハ之ヲ承認スルノ權利アルニ其義務ナシトス加之ナラスリヨンヲ氏ハ（孛國々法論第百十七条）政府カ議員ノ議決ナキ金額ヲ有益ノ費途ニ使用シ之ヲ證明スルトキハ其増支出ノ責任ヲ解キテ可ナリト云ヘリ貴問第一及第三ノ例ハ必要ノ増支出ニシテ第二ノ例ハ只有益ノ増支出トスルノミ故ニ予ヲ以テ之ヲ見ルニ右ノ三例ニ於テ政府ハ形式上豫算ニ違ヒタル支出ヲ為シ後ッテ議院ニ事後ノ承認ヲ求メサルヘカラスト雖モ其承認ハ第一及第三ノ例ニ於テ議院之ヲ拒ムヿヲ得サルモノトス第二ノ例ニ於テモ亦其剰餘金三百万円ヲ以テ之ヲ充用シタル證據アルヿ以上ハ政府ノ責任ヲ解クニ於テ充分ナリトス故ニ予ハ總テ三個ノ例ニ於テ政府ハ議定外ノ支出ヲナスノ權利アリト確信ス但シ孛國現行ノ法律ニ依レハ之カ為メ議院ニ向ッテ事後ノ承認ヲ求ムルノミ議院若シ此承認ヲ拒ムトキハ政府ハ斯ル抗拒

ヲ無効ノモノト宣言シテ之ヲ遵守スルヲ要セス從ッテ又其支出シタル金額ニ對シ責任ヲ負ハサルヲ以テ當然トス

第四ノ例ハ豫算超過ニ非ラス又豫算外ノ支出ニモ非ラス何トナレハ之レ只一定ノ目的ニ對シテ議定シタル金額ヲ增減シタルニ非ラサレハナリ而シテ其目的ノ如ク竣功ニ至ラサリシ丨ハ議院ニ對スル政府ノ責任ヲ基ヒスルモノニ非ラス此時ニ當テ政府ハ彼ノ經濟ノ拙劣又ハ浪費ヲ監督スル所ノ會計檢査院ニ對シテ責任ヲ負フヘキヤト云ハンノミ議院ハ金額ノ浪費ニ例シテ苦情ヲ述フルヲ得ルモ其苦情ハ純テ憲法上ノ効力ヲ有セス何トナレハ豫算ノ面ヨリ議院ノ議決ヲ犯シタルモノニ非ラサレハナリ但シ政府若シ堤防ヲ完成スル為メ其翌年ノ豫算ニ於テ不足金ヲ追求スルトキハ當初議之ノ金額ヲ以テ其堤防ヲ竣功セシノサリシ理由ヲ詳明セサルヘカラサルハ言ヲ俟タス如斯キ追求豫算ハ現ニ屢〻生来スルモノニシテ議院カ之ヲ憲法上ノ權利侵犯トシテ訴フルハ絶

テ理由ナキモノトス

第二貴問ノ金額ニ付テ答ンニ行政官ハ只豫算
金額ニ関シテ豫算中ニ畫定セラレタル範圍ヲ
越エ可カラサルノミナラス又其首其弱ニ對シ
テ議定シアル金額ヲ一定ノ目的ニ支出スヘキ
義務アルヤ疑ヒナシトス其目的ニ関シテ行政
官ハ本豫算ニ掲ケタル各項ノ金額ヲ格守スル
ノ外又其本豫算ノ基トナリタル明細豫算ノ金
額ヲ遵守シ約言スレハ議院ニ於テ各別ニ議定
シタル費目ヲ固ク守ラサルヘカラス故ニ豫算

ノ費目ヲ詳細ニ分科スルトキハ本豫算ニアル総金
額ヲ充用スルノ自由ヲ甚タ減縮セサルヲ得ス從
テ政府ハ一項ニ含蓄スル金額ヲ自由ニ處分シ
得ルハ只其金額ヲ拳テ全任スルトキニ限ルノミ之
レニ反シテ其金額ヲ一定ノ目的ニ支出スルトノ
明文アルトキハ右自由ノ處分全クナキモノトス
貴問第一ノ例ニ於テ政府若シ二砲臺ノ建築ニ對スル金
額ヲ求タルニ議院ハ単ニ一砲臺ノ建築費ヲ承認シ第
二ノ砲臺ノ建築ヲ明カニ否決シタリトセンニ政府ハ議定金
額ノ一部ヲ以テ第二ノ砲臺ノ建築スルコトヲ得

又但政府ハ議院ノ事後ノ承認アルヲ期シテ之ヲ決行スルヲ得ヘク然シテ其剰餘金ヲ以テスルノ場合ニ於テハ議院固ヨリ之ヲ承認スヘシト雖モ若シ其剰餘金ナク之レカ為メ既一ノ砲臺竣功セサルトキハ議院必ス其承認ヲ拒ムヘシ何トナレハ之レ豫算外ノ支出ヲ以テ論スヘキニ非ラスシテ必竟議院カ否決シタル支出ヲナシタルモノナレハナリ

第二及第三ノ例ニ於テモ議院若シ明カニ大砲十門ノ新調又ハ堤防十里ノ改築ヲ承認シタルトキハ前例ト同樣ニ判断スルヲ得ヘシ

又他ニ一例ヲ擧テ云シニ政府司法省ノ俸給豫算ニ於テ一裁判所ノ新設ニ對シ增額ヲ求メタルトキ議院カ之ニ関スル項ヲ議スルニ當リ之ヲ廢棄シタルトキハ政府ハ仮令其項ノ剰餘金ヲ以テ若クハ他ノ収入金ヲ以テ新裁判所ヲ起スニモセヨ之ヲ權利ナキノ處置トス

本豫算ノ基礎トナリタル明細豫算及之ト連帶スル恭考書ハ若シ議院ノ別段ノ議題トナリテ其議決ノ為メ政府ノ自由ノ處置ヲ制限シタル

トキハ政府之ヲ遵守スルノ義務アリ政府若シ之ヲ守ラスシテ議院カ否決シタル歳出ヲ為ストキハ之レカ為メ事後ノ承認ヲ求メサルヘカラス夫レ然リ然リト雖モ本豫算ノ參考書及ヒ豫算細目ニシテ若シ只ヲ説明トシテ議院ニ示サレタルモノ即チ議院ニ於テ其内ニ記載セラレタル事件及金額ヲ各別ニ議定セサリシトキハ政府ハ之レヲ遵守スルヲ要セス

仮令ハ貴問第一例ノ場合ニ於テ一砲臺ノ經費百万円ヲ請求シ其參考書ニ於テ土地買上入費十万円土工費二十万円等ト逐一費目ヲ列擧シタルモ議院ハ其全額百万円ヲ議定シタルトキハ政府ハ百万円ノ内譯即チ其細目ヲ自由ニ疑分スルヿヲ得例ヘハ土地買上ニ十五万円ヲ支出シ土工費ニ十五万円ヲ支出シ得ルカ如シ予カ知ル所ニ依レハ普國議院ハ通常ノ歳出ニ於テ千四百六十項ヲ議定ス其外臨時歳出ニ於テ凡ソ三百六十項并ニ各項ノ基ヰトナル許多ノ費目ヲ別々ニ議定ス

英三巴威國ニ付テハ貴問ニ答フル所稍〻異ナ

ラサルヲ得ス巴威國政府ハ憲法第七章第八條及千八百四十三年ノ法律第四條ニ因リ豫算各項ノ剩餘金ヲ臨時及豫算外ノ費途ニ自由ニ充用スルノ權ヲ有ス但此權ヲ施行シタルトキハ議院ニ向テ之レヲ證明セサルヘカラサルハ言ヲ俟タス又政府ハ國庫豫備金ヲ以テ斯ル費途ニ充用スルヿヲ得然レトモ巴威國ニ於テハ孛國ニ於ケルカ如キ特別ノ事後ノ承認ヲ要セス只支出ニ剩餘アリシヿト此剩餘金ヲ充用シタル經費ハ臨時及豫算外ノモノナリトノヿヲ證明スルノミ

然ルニ巴威國ニ於テ政府提出ノ豫算中ニ掲ケタル費目若シ議院ニ於テ否決セラレタルトキハ政府ハ只他ノ費目ニ於テ議定セラレタル金額ヲ超過スヘカラサル一點ニ於テノミ議院ノ決議ヲ守ルヘキ義務アリ故ニ政府ハ議院ノ否決シタル支出ヲ他ノ議定金額ノ範圍内ニ於テナスヿヲ得ヘシ然ルトキハ法律上ノ必要ナキ又ハ急ヲ要セサル他ノ支出ヲ節減セサルヘカラス

千八百八十八年二月十六日

パリヨスレル記ス

問

地方ノ行政廳又ハ自治ノ團體「州縣郡邑」ニ於ケル費用ハ、總テ法律ヲ以テ之ヲ定ムルカ、又ハ法律ヲ以テ其ノ範圍ノミヲ定メ、地方議會ノ其ノ範圍ノ内ニ於テ議定スルニ任スルカ、又ハ總テ地方議會ノ議ヲ以テ自由ニ其負擔ヲ定ムルニ任セ、法律ハ之ヲ制限スル所ナキカ

此ノ件ニ付白耳義ノ憲法ニハ之ヲ正條ニ揭ケテ以テ立法ノ方嚮ヲ示シタルニ、此ニ反シテ、普國ノ憲法ニハ之ヲ黙過シタルハ、何ノ理由ナル

四十

ヤ

右ニ付貴下ノ示教ヲ乞フ

明治二十一年二月七日　井上

ロエスレル君貴下

答

愚考ニハ法律ヲ以テ地方税ヲ規定スル事即チ政府ニ於テ代議院ノ承認ヲ経テ地方税則ヲ制定スルコトハ地方自治及地方分權ノ主義ニ違フモノト謂ハサルヲ得ス抑〻地方自治及地方分權ノ主義ニ從ヘハ地方ノ事務ハ地方自治体（町村、郡、縣）ニ於テ自ラ處理セサルヘカラス隨テ其自治ニ必要ナル資金ヲ議決スルノ權モ亦自治体ニ屬スルモノナリ地方自治体ハ之ヲ國家ニ比スルニ國ヨリ小國結ヲナスニ因リ其自治

ノ目的ト此目的ヲ達スルニ必要ナル資金トハ
甚タ密著スルモノトス何トナレハ土地ノ人民
ハ其地方ニアル諸施設物ノ利益ヲ最直接ニ享
受シ隨テ又其施設物ニ要スル經費ヲ直接ニ決
定シ得レハナリ故ニ法律ヲ以テ地方稅ノ賦課
徵收ヲ定ムルハ政府及代議院ハ地方治ニ干渉
スルノ基因ヲ造ルニ外ナラス是レ啻ニ無益ナ
ルノミナラス又啻ニ甚タ撫恤スヘキ事務ノ負
擔ヲ增加スルノミナラス亦實ニ危害ヲ生スル
コトナキニアラス何トナレハ一地方ノ需要及

經費ハ獨リ其地方自治体内ニ於テ正當ニ判斷
セラレ得レハナリ
然レトモ亦他ノ一方ヨリ見ルトキハ地方稅ヲ賦
課徵收スルノ權ハ都テ之ヲ地方官署及地方議
會ノ隨意ニ放任スルコトヲ得ス其所以ハ蓋一
國家全体ニ必要ナル稅源ヲ地方稅ニ因テ甚タ
狹縮スルコト莫ラシメンカ爲メ即チ國家ノ利
益上ヨリ其放任ヲ許スヘカラス蓋ニ内地ノ交
通ニ缺クヘカラサル自由及殖産ノ道ヲ甚シク
妨害スルノ稅則益ニ地方官及議會多數者ノ隨

意ヲ以テ小数者若クハ一定ノ納税義務者ヲ不
當ニ抑壓スル所ノ税則約言スレハ租税ノ通則
ニ違背スル地方税則ヲ施行スルコトナカラシ
メン為ノ即チ一般ノ政治及行政ノ利益上ヨリ
右ノ放任ヲ許スヘカラス
故ニ予ハ町村郡等カ其地方人民ニ課税スルノ
自由ヲ法律ニ依テ制限スルヲ最穩當ナリト信
ス而シテ其制限ハ上文ニ列挙シタル弊害ヲ減
ルヘクタケ豫防シ且ツ地方自治体ニ地方税則
議定ノ自由ヲ認許スルモ其自由ヲ施行スルニ
必ス政府ノ監督ノ下ニ於テナサシメ寡クモ緊
要ノ件ニ関シテハ政府ノ許可ヲ受ケシムル
ニアリ之カ為メニ制定スヘキ法律ハ何々ノ税
ハ町村郡等ニ於テ之ヲ施行シ得ルヤ直税ナル
ヤ若クハ間税ナルヤ若クハ國税ヲ標準トナシ
テ賦課スル附加税ナルヤ若クハ從来ノ地方税
ナルヤ又ハ附加税ハ何ノ程度マテ之ヲ許スヤ
地方税ヲ納ムヘキ義務者ハ何人ナルヤ其納税
力ハ如何ナル方法ヲ以テ評定スルヤ等ノ事件
ニ関シテ各〻之カ規定ヲ設クヘシ是ニ於テ地

方官及地方議會ハ斯ノ如キ法律上ノ範圍内ニ於テ土地ノ需要ト事情ニ應シ已レノ最モ適當ト信スル規定ヲ設ケ高等官衙ノ許可ヲ受ケテ之ヲ施行スヘシ

白耳義ノ憲法ニ於テ地方稅ハ地方議會ノ承認ヲ經ルニアラサレハ之ヲ徵收スルヲ得スト定メタリ蓋シ白耳義ニ於テ此一文ヲ必要トナシタル所以ハ旧政府ノ時ニ當リ地方議會ノ承認ナクシテ地方稅ヲ徵收シタルコトアリテ當時大ニ民心ヲ損シタルト並ニ法律ニ根據シテ地方稅ヲ徵收スルノ一義ハ元來地方自治ノ主義ニ矛盾スルニモ拘ラス當時ニ在テハ論者之ヲ正當ノ自由主義ナリト誤認シ大ニ之ヲ唱道シタルトニ原因スルナリ

佛國ニ於テハ憲法第百五條ニ（千八百五十三年五月二十四日ノ法律ニ據リ）「町村郡及縣ノ民選議會及行政ハ別法ヲ以テ之ヲ定ム」ト記載シアルノミ予ハ此簡短ナル一文ヲ以テ充分ナリト信ス何トナレハ地方議會及地方政務ニ関スル原則ヲ憲法中ニ列挙スルハ為シ得ヘカラサル

事ニシテ且ツ個々ノ事件ヲ逐一憲法ニ掲クヘキ理由ヲ見出サヽレハナリ況ンヤ白耳義ニ於ルカ如ク憲法ニ普通ノ原則ヲ掲ケタルニモ拘ラス別法ヲ以テ其細則ヲ設ルニ當リ大ニ原則ノ主意ヲ変改スルノ場合ナキヲ保スヘカラサルニ於テオヤ顧フニ孛國ハ白耳義ノ如キ憲法ノ通則ヲ設ケテ事ヲ過ルヨリモ寧ロ他日深思熟慮シテ以テ地方行政組織ヲ精密ニ規定スルノ優レルニ如スト思惟シタルナラン故ニ憲法第百五條ノ最初ノ主意ハ前記千八百五十三年

ノ全ク概汎ナル法律ヲ以テ補充シタリ近時ニ於テハ世人地方自治ノ制ヲ大ニ重ンスルカ故ニ地方自治ノ原則及自治体ニ對スル政府ノ監督ヲ憲法ニ明記スルハ固ヨリ希望スル所ナリ然レトモ是レ唯其汎則通規ニ止ムルヲ可トス左ナキ時ハ地方制度ニ関スル別法ヲ豫メ拘束スルノ嫌ヒアリ孛國ニ於テハ當初憲法第百五條ニ於テ地方制度ニ関スル詳細個々ノ規定ヲ列擧シタレトモ其後其規定ノ實施スヘカラサルヲ悟リ之ヲ廢シタリ

千八百八十八年二月十四日

ハー、リヨースレル記

問

普國ニテ大藏大臣ハ罹災ノ窮民ニ對シ其租稅ヲ免除スルノ權利ヲ有スト聞ケリ果シテ然ラハ其之ヲ免除スル為ニ何等ノ要件(マンダチヨン)アリヤ又何等ノ制限モナキヤ乞教

井上

ロエスレル氏貴下

答

予ハ貴問ニ答フルニ際シ租税免除ニ関シ純然タル恩赦及權宜ヨリ生スルモノト法律ノ規定ニ從ヒ行政上ノ手續ヲ以テスルモノトヲ區別スヘシト認ム、

純然タル恩赦及權宜ヨリ生スル免税ハ赦免權又一層正當ナル語ヲ用フルトキハ免除權ノ執行ニ依テ之ヲ為スヲ得ルノミ而シテ此權ヤ孛國ニ於テハ國王ノ特有ニ帰スレヒ如何ナル場合ニ在テモ一大臣殊ニ大藏大臣ノ副署アルヲ

例規トス予ノ見ル所ニ依レハ赦免權ハ刑罰ニ
關シテ施行スルヲ得ルノミニシテ臣民ノ義務
ニ係テハ施行スルヲ得ス免除權ハ孝國憲法ニ
掲載セサレヒ實際尚之ヲ施行シ以テ憲法頒布
前ニ承認セラレタル國王ノ權利ヲ繼續セリ而
テ孝國々王ハ千八百二十四年十二月十八日ノ
會計檢査院章程ニ於テ此ノ免除權ヲ保存シタ
リト雖千八百七十二年三月二十七日ノ會計檢
査院法ニ於テハ代議士院ノ異議ニ依リ之ヲ除
キタリ然レヒ憲法ニ此權ヲ禁止スルノ明文ナ

キノミナラス爾來續々之ヲ執行シタルノ事實
アルヲ以テ政府ハ千八百六十二年ヲ以テ尚之
カ實行ヲ試ミタリ蓋國法学ニ於テハ英國ノ原
則ニ倣ヒ法律ノ明文ヲ以テ此權ヲ與フルニ非
サレハ許サヽルモノトセリ然レヒ索國政府ハ
從來此權ノ保存ニ付疑ヲ容レサルノミナラス
又一ハ權宜ニ適フ為メ一ハ納稅者ノ資力ヲ害
セサル為到底欠クヘカラサルノ理由ヲ以テ其
口實トナシタリ今ヤ索國ニ於テ實際免稅權ヲ
執行スルヤ否及其程度ニ至テハ予之ヲ陳辯ス

ルヲ得スト雖モ主義上尚此權ノ存續スルハ爭フヘカラサルトス蓋英國憲法ノ原則ハ直ニ獨逸國ニ採用スヘキモノニ非ス獨逸國法ニ依レハ國王ハ法律ノ明文ヲ以テ制限セラレ又ハ取除ケラレサル限ハ免除權ヲ占有スヽ而シテ茲ニ其數例ヲ擧ケンニ巴威尔憲法第三章第四条ニ依レハ法律ヲ以テ許シタル免稅ノ外國民ニ對シ公然ノ負擔ヲ免除スルヲ得ス又瓦敦堡ニ關シテハ「モール」氏其瓦國々法論第一卷第二百九丁第二百二十七丁ニ於テ免除權ノ存續ヲ主張ス索國ニ關シテハ「リヨンヲ」氏其索國々法論第四卷第四百十八条第七百四十五丁ニ於テ論スル所全ク此權ヲ排斥シタルニハ非サレトモ凡ソ租稅ノ免除ハ純然タル恩典ニ出ヘカラス豫メ之カ檢査ヲ為スカ若クハ十分ノ理由アルニ非サレハ之ヲ許可スヘカラサルノミナラス屢々其許可ヲ與ヘ以テ法律ヲ無効タラシムヘカラストノ說ヲ為スヽ殆ント「モール」氏ノ所見ニ異ナルヿナシ而シテ此制限ヤ正當ナルモノト認メサルヲ得ス但茲ニ注意スヘキノ一事ハ

免税權ハ大藏大臣ニ屬セス一大臣ノ副署ヲ以テ國王ノ特有ニ帰スルヿ是ナリ

法律ノ規定ニ準據スル行政上ノ免税ハ正當ノ順次ヲ經テ管轄廳之ヲ行フモノトス其判定ヲ行政廳ノ意見ニ任スルト納税者ノ法律上權利ト認ムルノ區別ニ從ヒ甲ノ場合ニ於テハ大藏大臣終審ノ裁決ヲナシ乙ノ場合ニ於テハ行政裁判院其裁決ニ任スルモノトス予ノ知ル所ニシテ果シテ誤ナキトキハ孛國并ニ巴威尔ニ於テハ行政廳其終審裁決ヲ為スモノ如シ蓋巴威尔ニ於テハ千八百三十四年七月一日ノ免税法アリ而シテ該法ニ依ルトキハ凡ソ免税ハ納税義務者ノ過失アルニ非ス損傷ノ為メ納税物ノ收穫ヲ減スルヿ四分一以上ナル場合ニ限リ之ヲ許可スヘシ孛國ニ於テハ各個ノ租税ニ關シ各別ノ法律ヲ以テ免税ノ事ヲ制定セリ

孛國千八百六十五年八月二十一日勅令ニ依ル

ニ猶地税ハ洪水水害降霜暴風ノ如キ天災ノ為平均收穫ヲ損失スルコト三分一以上ナル時ハ之ヲ減税スヘシトシタリシニ千八百六十七年

二月六日ノ勅令及千八百六十七年二月八日ノ法律第五十二条ヲ以テ國庫ニ對スル免税ノ請求ハ後来之ヲ許可セス而シテ免税ヲ許可スルノ決議ヲ為スノ權又之ヲ補充スルノ目的ヲ以テ國庫ニ對シ一定ノ資金ヲ徴收スルノ權ヲ拳ケテ州會又ハ其他ノ地方議會ニ放任スヘシト規定ス蓋孛國ニ於ケル地租補充資金ハ千八百三十九年一月二十一日ノ勅令ヲ以テ設置シタルモノ是ナリ

家屋税ノ免除ハ千八百六十九年五月二十一日ノ家屋税法第十九条ヲ以テ制定セリ該法ニ依ルトキハ火災又ハ其他ノ天災ノ為一箇年ノ家屋収益ヲ全失シ又ハ其一部ヲ失フコト一箇年ノ使用収益ノ三分一以上ニ出テ又ハ一箇年間全ク家屋ヲ使用セサル場合ニ於テ免税ヲ許可スヘキノ規定タリ

営業税ノ免税ニ関シテハ千八百六十一年七月十九日ノ法律第二十一条千八百七十二年三月二十日ノ法律第二条及千八百七十四年六月五日ノ法律第二条ニ於テ大抵上ト同一ノ規定ヲ

没ク

以上論述シタル免税權ヨリ生スル免税ノ問題ハ政府ハ豫算ノ收入ヲ必定徵收スヘキ無限ノ義務ヲ有スルヤ否ニ関スル点ヨリ論スレハ憲法上ニ必要ノ関係アリ而シテ豫算ヲ以テ如何ナル場合ニ於テモ必定遵守スヘキ効力アルモノト見ルトキハ検査上ヨリ出ル免税權ハ既ニ成立スルヲ得スト雖モ豫算ハ元来概算ノ性質ヲ帯ルモノナレハ之ヲ履行スルト否トハ當時ノ事情如何ニ依ルヘキナリ予ノ見ル所ニ依レハ豫算ハ未タ以テ憲法ニ準據スル行政權ヲ廃減スルニ足ラス而シテ其他ノ豫算超過ヲ生シタル場合ニ於テ尚之ヲ承認スヘキヤ又豫算ニ関スル無限ノ裁決權ハ総テ之ヲ議院ニ与フヘカラサルヤノ重要ナル理由ハ則チ此一点ニ帰スルナリ

千八百八十七年十二月二十三日　リヨースレル再拜

問

一 紙幣ノ發行ハ法律上ニ於テ國債ト同シク看做シ議會ノ承認ヲ要スヘキヤ（但會計法ニ於テ許可シタル大藏大臣ノ毎年發行スル短期證券ヲ除ク）

一 晉憲百四条ニ謂ヘル豫算ノ超過トハ豫算ニ定メタル科目中ニ於テ其定額ノ外ニ出支出シタルノ場合ノミニ止マレルノ意カ又ハ豫算ニ其科目ヲ指示セサル所ノ支出ヲモ包含シタルカ

若後段ノ意義ナリトシテ解釋スルトキハ彼ノ英國ニ所謂芝マリタル各個科目ノ金額ハ其目的ノ外ニ支用スルヲ得ストノ原則ハ（カル二世ノ時ノ約款）吾國ノ必シモ采用セサル所ナルカ

右ノ二条ニ付貴下ノ示教ヲ乞フ

二十一年一月二十七日　井上

ロスレル博士貴下

答

（第一）紙幣ハ一般ニ無利息ノ國債トシテ觀察スル而シテ此点ヨリ論スルトキハ紙幣ヲ発行スル為メ議院ノ承諾ヲ要スルハ當然ナルモノヽ如シ大藏省證券ハ歳計豫算ニ於テ既ニ政府ニ許可シタル收入ヲ以テ銷却シ得ル場合即或ル收入ヲ一時先收スル為ノ行政上ノ經常負債ニ止マル場合ニ限リ此原則ノ例外トス（「リヨンス」氏等國々法論英一巻第百二十三条「マイエル」氏獨乙國法論英二百三条）但獨乙帝國ニ於テハ千八

百七十四年四月三十日ノ法律第八条ヲ以テ凡ソ大藏省證券ハ法律ニ依ルニ非サレハ之ヲ發行スルヲ得スト明言シタリ

然レトモ前記ノ獨乙帝國法律アルカ為メ獨乙國ニ於テハ實際上効用ナキニモ拘ハラス予ハ此事ニ関シ異説ヲ唱フル者ナキヲ保證シ難シ

蓋孛國憲法第百三条ニ於テハ純然タル借金ヲ掲ケタルニ過キスシテ汎ク國債ヲ載セタル意ニ非スト而シテ紙幣ノ發行ハ借金契約ニ非ルヤ判然タリ何トナレハ紙幣ノ發行ハ銷却ノ点ヨリ論スルモ又利子ノ点ヨリ見ルモ到底政府ニ新規ノ負擔ヲ被ラシムルモノニ非サレハナリ抑モ紙幣ハ其性質ニ於テ必ス銷却若ハ兌換スヘキモノニ非スト而シテ亦利子ヲ付セサルヲ例トス假令政府ニ於テ所持人ノ求メニ依リ兌換ヲ約束スルコトアルモ是レ元来借金契約ヨリ生スル必然ノ銷却ニ非スシテ紙幣ノ相場ト流通力トヲ安全ニスル為メナル任意行政上ノ處分ニ外ナラス而シテ兌換ハ寧ロ貨幣ヲ以テスル交換ナリト謂フヲ得ヘク且兌換ノ紙幣

ハ復何時ニテモ更ニ之ヲ發行スルヲ得ヘシ夫レ兌換ニハ一定シタル平均ノ貨幣額ヲ要スヘシト是紙幣ノ大部ハ兌換ヲ求ムルモノニ非サルカ故此貨幣額タル発行紙幣ノ全額ニ比スレハ通例僅ニ一小部分タルニ過キス而シテ紙幣兌換ノ為メ貨幣ヲ準備スルコトニ決スルニ於テハ政府ニ對シ支出ノ負擔ヲ生スルハ固ヨリナルモ通常ノ原則ニ從ヒ之ヲ歳計豫算ニ掲載スルヲ以テ充分ナリトシ紙幣發行ノ為メニハ必ス特ニ議院ノ承認ヲ受クヘキノ要用ナキモノ、如シ

固ヨリ予ハ立憲制ノ主義ニ依リ紙幣ハ法律ヲ以テ發行スヘシト説ヲ為ス者ナリ蓋此説ヲ為ス所以ノモノハ紙幣ハ國債ナリトスルノ故ニ在ラスシテ紙幣ノ流通ニハ其通貨タル公然ノ効力ナカルヘカラス而シテ之ヲ与フルハ法律ヲ以テスルニ非サレハ能ハサルコトナルカ故ニ在ルナリ之ヲ要スルニ予カ説ノ前記ノ觀察ニ異ナル所ハ紙幣ノ發行ハ通常法律ヲ以テスルヲ得ヘシ隨テ亦緊急ノ場合ニ於テハ危急

命令ニ依ルヲ得ヘキモ國債ヲ起スニハ憲法ニ明文ナキニ於テハ若急命令ニ依ルヲ得サルニ在ルナリ

(第二)孛國憲法第百四条ニ渭ヘル歳計豫算ノ超過トハ從來歳計豫算科目中ノ超過支出ト豫算外ノ支出トヲ包含スト雖實際ニ於テハ其間ニ區別アルコトナシ何トナレハ科目間ノ流用ヲ許サヽルニ於テハ兩者共ニ議院ノ事後承認ヲ要シ又他國ノ憲法ノ如ク豫算上ノ剩餘ヲ以テ超過支出若ハ豫算外ノ支出ニ充ツルノ處分ヲ政府ニ任スルニ於テハ更ニ其承認ヲ要セサレハナリ

然レトモ孛國ニ於テハ漸ク歳計豫算超過ノ兩種ヲ區別シ以テ專ラ立憲上議院ノ議税權ヲ擴固ナラシメンコトヲ務ムルニ至リタリ而シテ殊ニ既定ノ決議ヲ害スル所ノ純然タル超過(他ノ超過ハ決議ヲ傷害セス)ニ関シテ最モ判明ナリ蓋千八百七十二年三月二十七日ノ會計檢査院法第十五条ニ於テ孛國憲法第百四条ニ渭ヘル歳計豫算超過ヲ解釈シテ曰ク純然タル豫算

超過トハ確定豫算ニ於テ各項間ノ流用ヲ許シ以テ甲項ノ減額支出ヲ乙項ノ増額支出ニ充ツルノ餘地ヲ与ヘサル限リニ於ケル各款各項ノ超過支出ヲ謂フト故ニ予國ニ於テモ明文ヲ以テ例外ヲ許サヽル限ハ既ニ承認ヲ經タル收入ハ其目的外ニ支出スルヲ得ス又前記ノ法律ニ依レハ政府ハ各別ノ議決ニ付シテ豫算ニ表示シタル所ノ各科目ヲ遵守スヘキナリ

其他前記ノ法律ニハ歳計豫算外ノ支出モ亦次年ニ於テ議院ノ承認ヲ受クヘキコトヲ併セテ明揭ス

リヨースレル再拜

問

外國ト締結セル條約ハ法律ト同シク國民ニ遵行義務アルモノトスルトキハ後テ條約ニ由テ生スル國民ノ義務ハ法律ヲ以テ定メタル義務ト同視スヘキ者トスル乎例之ハ條約ニ由テ甲ノ國ニ向テ乙ノ國ヨリ毎年若干金額ヲ補給スヘク又ハ償給スヘキヿヲ定メタランニハ其金額ハ國債ト同ク法律上國民ノ義務トナリ議院ハ年々ノ豫算ニ依テ其金額ノ支出ニ異議ヲ容ル、ヿ能ハサルヘキ乎貴下ノ明教ヲ煩ス

明治二十一年二月十二日

モヌセ君

ロエスレル君

井上毅

答

此問題ニ関シテ予ハ曩ニ既ニ詳細ノ意見書ヲ呈出シタリト記臆ス故ニ今此ニ唯其要領ヲ簡短ニ陳述セント欲ス

昔時英國ニ於テ凡ソ主權者ノ締結シタル國約ハ全國ヲシテ之ヲ遵奉セシムルノ効力アリトヲ為セリ今日ト雖モ此原則ヲ唱道スルモノナキニアラス其主權者トハ條約ノ事ニ於テ國王ヲ指スモノナレハ國内如何ナル權力モ國王ノ締結シタル國約ニ抗抵スルコト能ハス即チ此國

約ヲ破毀シ得サルモノトス但シ此締約權ノ濫用ヲ防制スル一手段ハ宰相告訴ニアルノミ（スチーブン氏英法注釈第二巻四百九十一葉）然ルニ近時ニ於テハ凡ソ外國トノ条約ニシテ之ヲ實施スルニ議院ノ決議ヲ經サルヘカラサルモノハ議院ニ於テ之ヲ可否スルノ權アルコトヲ認定シタリ例之ハ實施ニ必要ナル金額ノ承認ノ如キハ即チ之ニ屬スト謂フ（ドット氏議院政治論第一巻六百十葉）其他諸種ノ条約（例之ハ郵便電信条約ノ如シ）モ之ヲ國内ニ實施スルニ當リ議院ノ承認ヲ得サルヘカラス（マイ氏英國議院論第二十一章）

北米合衆國ニ於テハ憲法ニ定メテ曰ク凡ソ合衆國ノ名ヲ以テ締結シタル条約ハ内國ノ最上法律ニシテ各裁判所ハ之ヲ遵奉セサルヘカラス外國トノ条約ハ元老院議員三分ノ二以上ノ賛成ヲ得テ行政權ノ占有者タル大統領之ヲ締約ストアリ合衆國ニ於テ外國トノ条約ハ法律ト同一ノ効力ヲ有スルカ故ニ裁判所ハ他ノ法律ト同樣ニ直ニ之ヲ施行スルヲ得ヘシ条約實

施ノ為メ特ニ國會ノ議決ヲ得ルヲ要トサルナリ故ニ國會ハ其条約ノ實施ニ缺クヘカラサル金額ヲ承認スヘキ義務アリトス他語ヲ以テ言ヘハ國會ハ此場合ニ於テ金額承認ニ關スル不羈ノ權ヲ使用スヘカラサルモノトス（ストリ氏合衆國憲法注釋第二篇五百七十九葉乃至五百八十五葉）予カ知ル所ニ據レハ此原則ハ當ヲ國會ニ於テ異議ヲ起シタルモノアルニモ拘ラス今日合衆國ニ於テ現行スルモノナリ

獨乙國ニ於テ条約ヲ締約スル行政權ハ一定ノ場合ニ於テ議院ノ承認ヲ經テ始メテ其効力ヲ得ルコトアリ例之ハ獨乙帝國憲法第二条ニ從ヘハ帝國立法權ノ範圍内ニ入ルヘキ事件ノ条約ハ之ヲ締結スルニ聯邦參議院ノ承認ヲ要シ之ヲ實施スルニ帝國々會ノ承認ヲ要スルカ如シ

孛國ニ於テハ憲法第四十八条ニ據リ國王カ外國政府ト締結スル条約ハ若シ通商条約ナルトキ又ハ之カ為メ國ノ負擔ヲ起シ又ハ各個ノ國民ニ義務ヲ負ハシムルトキハ代議院ノ承認ヲ

経ルニアラサレハ効力ナキモノトス白耳義憲法第六十八条ニ於テモ亦同一ノ規定アリ而シテ此ニ擬ケタル負擔及義務トハ何ヲ指スヤノ一点ニ於テ議論紛々タリ李國政府ノ實際施行スル慣例ニ依テ之ヲ見ルトキハ是レ必スシモ条約ノ實施ニ必要ナル一切ノ經費ニ関係スルモノニアラス

然ルニ李國ニ於テハ条約ノ有効ナルトキモ尚議院ハ其条約施行ノ為メ政府ノ請求スル金額ヲ拒絶スルノ權アリト主張スルモノアリ此説ハ憲法第四十八条ニ基キタルニアラス即チ其一般ノ豫算承認權ハ条約ヲ締結スル行政權ノ為ノ障害セラレサルモノナリトノ理由ニ基クナリ（リヨンヲ氏李國々法論第一巻百二十七条）

蓋シ此説ハ英國憲法ノ新原則ヲ獨乙ニ移シタルモノニシテ予ハ之ヲ不穏當ト謂ハサルヲ得ス何トナレハ英國議院ハ政治上ノ理由ヨリシテ政府ノ豫算案ヲ自由ニ廃棄スルノ權ハ獨乙ノ代議院ニ属セサレハナリ此事ハ予カ曩ニ豫算超過緊急令等ノ意見書ヲ呈シタル際曲サニ

辯明シタリ抑〻法律上必要トスル經費ハ代議院ニ於テ之ヲ拒ムノ權ナシトスルノ原則ハ獨乙國ニ現行スルモノナリ今支レ有効ノ條約ハ法律上ノ必要ヲ生ズルコト通常ノ法律ニ異ナラス然ルニ代議院若シ其豫算承認權ヲ以テ恣〻ニ其条約實施ニ必要ナル經費ヲ拒ムトキハ政府ハ國際法上ノ条約ヲ履行スルコト能ハスシテ外國トノ交際ヲ為シ得サルニ至ルヘシ此ニ於テ政府ハ恰モ倒産負債者カ其債主ニ對スル義務ヲ果スコトヲ得スシテ治産權ヲ失フト同樣ノ地位ニ陷ルヘシ要スルニ有効ノ條約ニシテ式ニ依リ發布セラレタルモノハ國民一般之ヲ遵守シ隨テ代議院モ亦之ヲ遵奉スヘキハ再他ノ法律ニ異ナルコトナシ故ニ代議院カ豫算ノ否決ヲ以テ法律若クハ条約ノ施行ヲ扞制スルノ權ハ何レノ國ニ於テモ現行スルコトナシ設令其行ハレンコトヲ欲スルモ決シテ行ハレ得サルモノトス英國ニ於テモ亦議院實ニ此權ヲ行フニアラス唯内國ノ更迭ヲ促ス為メ一ノ方策ニ利用スルノミ況ンヤ獨逸ニ於テ内

閣更迭ノ事議院ニ関係ナキニ於テハ
以上述ヘタル如ク有効ノ条約ハ法律上ノ必要
ヲ生来シ即チ代議院ノ方ヨリモ政府ノ方ヨリ
モ之ニ異議ヲ容ルヘカラサルモノナリ而シテ
其条約ヲシテ有効ナラシムルノ条件コンヂーション
ハ各國之ヲ異ニス某國ニ於テハ行政權ノミヲ
以テ有効ノ条約ヲ締結スルコトヲ得ルモ他ノ
國ニ於テハ部ヲ代議院ノ承認ヲ得ルヲ要シ又
ハ條約ノ種類ニ由テ其承認ヲ經ルニアラサレ
ハ有効ナラスト定ムルモノアリ亭國ニ於テ國

王ハ專斷ヲ以テ媾和条約ヲ締結スルノ權アリ
故ニ此条約ノ為メ國家ニ億万円ヲ負擔セシム
ルモ不可ナルコトナシ之ニ反シテ通商条約ハ
代議院ノ承認ヲ經ルニアラサレハ之ヲ締結ス
ルコトヲ得ス北米合衆國ニ於テハ一切ノ条約
必ス元老院ノ承認ヲ要スルノ制規ナリ蓋シ其
元老院ハ外交上ノ事ニ於テ一ノ議院タルヨリ
モ寧ロ一ノ參議院タル地位ヲ有スルナリ英國
ニ於テ凡リ主權者ノ締結シタル條約ハ別段ノ
法律又ハ該条約中ノ明文ニ依リ議院ノ議ヲ經

ヘキモノヲ除ク外都テ有効ノモノトス依是観之条約ノ有効ト否トハ各國ニ於テ其定ムル所ノ条約ニ由テ異ナレリ詳カニ言ヘハ条約ヲ締結スルノ權或ハ制限セラレ或ハ全ク不覊ナルコトアリ然レトモ彼此何レノ場合ニ於テモ其有効ヲ基ヒスヘキ条件悉ク踐行セラレタル上ハ条約ニ同一ノ効力ヲ得セシメ國民カ之ヲ遵奉スルニ於テ彼我ノ別アルヿナシ故ニ代議院若クハ元老院ノ決議ヲ經テ締結シタル条約ハ必ス施行セサルヘカラス之カ為メ必要ノ經費ハ

議院ニ於テ拒ムヘカラストナストキハ夫ノ憲法ニ依リ行政權ノミヲ以テ締結シ得ヘキ条約ニ在テモ亦同様ナラスンハアルヘカラス

前文ニ述ヘタル意見ニ反對シ若シ果シテ此ノ如クナルトキハ代議院ノ豫算議定權及立法權ヲ破滅スルニ他ナラスト言フ者アレトモ獨乙ノ國法ハ全ク不覊ノ決議權ヲ代議院ニ付与セサルモノナレハ右ノ反對説ハ英國ノ議院政治ニ適當スルヤ未タ知ルヘカラスト雖モ獨乙ノ國法ニ戻ルヤ甚タ明カナリ若シ夫レ一般ニ行政

權ナルモノハ有効ノ條約ヲ締結スルニ制限ヲ受クヘキ法理アルヤ否ハ全ク別問題ニ屬セリ予ヲシテ日本ノ為ヲ言ハシムレハ此点ニ於テ行政權ニ制限ナキヲ先當トス何トナレハ日本ニ於テハ君主制ノ主義ヲ成ルヘク保有スルヲ要スレハナリ又設令斯ノ如クナルモ議院ハ条約ノ事ヲ左右スルノ手段方法ヲ充分ニ有スルナリ之ニ反シテ外交談判ノ落著後形式上ノ議決ヲナス如キハ徒ラニ虫礼空文タルニ過キサルヘシ此問題ハ先般既ニ論述シタルモノナレハ此ニ之ヲ贅セス

十八百八十八年二月十七日　リヨースレル記

答

一國ノ君主ハ國際法上、外ニ向テ其國ヲ代表スト云ハ今日一般ニ認定スル所ナリ故ニ君主ハ其國ヲシテ外國ニ對シテ權利ヲ得セシメ及義務ヲ負ハシメ就中外國ト条約ヲ締結スルコトヲ得

專制君主國ニ於テ君主カ締結シタル条約ハ國際法上、外ニ向テモ又國法上、内ニ向テモ無論、効力アルモノトス

然ルニ立憲國ニ於テハ内外ノ間、區別ナキヲ得

又条約ヲ締結スルニハ都テ又ハ一定ノ場合ヲ
限リ議院ノ承同ヲ要スト憲法ニ明記スルヲ得
ヘシ例之ハ北米合衆國ノ憲法ニ於テ上院カ外
國条約ノ事ニ承同スト定メタルカ如シ学國憲
法第四十八条モ亦此ニ属スルヤ否ヤ議論未タ
一定セス
憲法ハ又条約ノ締結ヲ專ラ君主ノ特權ニ入レ
ルコトヲ得此場合ニ於テ君主ハ法律上外ニ向
テ有効ノ条約ヲ締結スルノ權ヲ有シ且ツ其条
約ハ議院ノ承認ナクモ一方ノ締約國ニ對シテ
効力アルモノトス是レ英國法ノ精神タルヤ疑
ナシトス獨乙國一般ニ行ハレル理想ニ從ヘハ
李國白耳義及ヒ獨乙帝國ノ憲法ニ在テモ亦然
リ
然リト雖モ君主カ締結シタル条約ハ國内ニ向
テ何ノ効力ヲ有スルヤハ右ノ論ヲ以テ未タ決
定セサルモノトス顧フニ条約ヲ以テ法律ノ如
ク權利義務ノ一源泉ト看做シ恰モ法律ノ如ク
國民ニ遵守ノ義務ヲ負ハシムルモノト解釈ス
ルハ穩當ナラス抑ヘ条約ナルモノハ締約者双

方ノ間ニ於テ義務ヲ生スルノミ即チ兩國ノ条約ハ單ニ其政府トノ間ニ於テ義務ヲ生スルノミ其國ノ人民ニ對シテハ唯其政府カ自己ノ政權ヲ以テ之ヲ命スルトキヲ俟テ始メテ遵守ノ義務ヲ生スルノミ國民カ之ヲ遵守スヘキ義務ノ源泉ハ条約自己ニアラスシテ政府ノ命令ナリ故ニ諸國ニ於テ列國条約ヲ國内ニ公布スルニ當リ之ニ附スルニ「該條約ヲ遵奉スヘシ」「該条約ニ從テ憲置シ裁判スヘシ」等ノ命令ヲ以テスル事國ノ實例之ニ異ナリ單ニ条約文ノミヲ公布スルハ國法上ノ正當ナル原理ニ違フノ故ヲ以テ論者ノ大ニ非難スル所ナリ

左レハ君主ハ人民ノ遵奉スヘキ規定ヲ公布スルノ權利ヲ有スルモ然カモ此事ニ關シテ憲法ニ依テ制限セラル、以上ハ其親カラ締結シタル条約ヲ施行スルニ當テモ亦其制限内ニ於テ為サ、ルヘカラス故ニ君主カ何ノ程度マテ自カラ其条約ヲ施行セシノ得ルヤハ主トシテ其國ノ憲法ニ於テ法律ト行政令トノ限界ヲ定ムル如何ニ係レリ若シ其憲法上ノ制限ヲ何ハサ

ルトキハ君主ハ憲法上議院ノ承認ヲ經ルニアラサレハ公布スヘカラサル命令ヲ議院ノ承認ナクシテ公布シタル違憲ノ處置ヲ為シタルコト、ナルヘシ然レトモ憲法ニ於テ代議院ノ承認ナクシテ現行法律ヲ變改シ若クハ新ニ國民ニ課税シ及義務ヲ負ハシメ得ルトノ明文ナキ時ハ凡ソ法律ノ變改及國民ノ義務ニ関スル外國條約ハ代議院ノ承認ナクシテ實施スルコトヲ得ス他語ヲ以テ之ヲ言ヘハ條約ニシテ憲法上立法ノ手續ヲ履ミテ施行スヘキ事件ヲ包含スルモノハ之ヲ内地ニ施行シテ國法上ノ効力ヲ得セシムルニハ代議院ノ承認ヲ經サルヘカラス

右ノ如ク論シ來レハ議院ハ列國條約上ノ義務ヨリ生シタル經費ヲ否決シ得ルヤノ問題ヲ解クコトヲ得ヘシ

此問題ハ左ノ場合ニ區別シテ之ヲ解クヘシ

(第一)條約ハ代議院ノ承認ヲ經テ法律トナリ既ニ公布セラレタルトキハ之カ經費ハ代議院ニ於テ承認セサルヘカラス更ニ之ヲ直言スレハ

其經費ノ額既ニ条約中ニ確定シアレハ之ヲ支出スルニ別ニ代議院ノ承認ヲ要セス其經費ノ額若シ未定ナルトキハ代議院ハ其金額ノ多寡ヲ承認スルノミ

(第二)条約ノ全部、法律トナリテ公布セラレサルモ其實施ノ為メ議院ノ承認ヲ經テ別段ノ法律ヲ發布セラレタルトキモ亦第一ノ場合ト同視スヘシ

(第三)前記第一及第二ノ場合ニ於ルカ如キ条件ヲ缺クトキハ憲法ノ定ムル代議院ノ歳出承認

權ト君主行政令發布權トノ限界如何ニ由テ其答ヲ異ニセサルヘカラス

(甲)憲法ニ於テ若シ行政令ノ實施ニ(例之ハ官官制ノ施行)必要ナル支出ヲ議院ノ承認權ヲ取除クトキハ条約上ノ義務施行ノ為メ發布シタル行政令ニ因テ必要トスル經費モ亦議院ノ承認ヲ經スシテ可ナリ故ニ例之ハ条約ニ依リ一定ノ官署ヲ(例之ハ郵便電信ノ為メ又ハ関税ノ為メ)設置セサルヘカラサルトキ議院ハ其勅令ニ依テ定メラレタル官署ノ

経費ヲ否決スルノトヲ得サルカ如シ

(乙)之ニ反シテ憲法ニ於テ行政令ノ為メ議院ノ豫算議定権ニ制限ヲ設ケス却テ豫算議定権ヲ以テ行政令ヲ制限スルコト獨逸英三國ノ法律ニ於ルカ如クナルトキハ第三ノ場合ニ於テ条約ハ代議院ヨリ之カ経費ノ承認ヲ得ルニアラサレハ之ヲ施行スルコトヲ得ス甲ノ例ニ在テモ若シ勅令ノ効力ニ関係ナキ経費アルトキハ同シク代議院ノ承認ヲ経ルニアラサレハ其条約ヲ施行スルコトヲ得ス

千八百八十八年二月十五日　モッセー記

問

式ニ依レル条約ハ法律ト同一ノ効力ヲ有スルカ故ニ条約ニ由テ生スル國庫ノ義務タル支出ハ議會ニ於テ之ヲ拒ムヿヲ得ストハ既ニ貴下ノ明教ニ依テ了解スルヿヲ得タリ但シ此主義ヲ推廣シテ「条約ニ由テ生スル義務ヲ補給スル為メノ租税ハ議會ニ於テ之ヲ拒ムノ權ナシ」トヽ云フヿヲ得ヘキカ更ニ乞教

答

貴問ニ載セタル主義ハ一定ノ条件アルニ非サレハ之ヲ新税ノ承認ニ及ホスヲ得ス

政府ハ式ニ依テ有効ノ条約ヲ締結シタルノ故ヲ以テ議院ニ向ヒ「予ハ此条約實施ノ為ノ壱百万円ノ經費ヲ要ス故ニ卿等壱百万円ノ新税ヲ可決スヘシ」ト謂ヒ得ルカ如ク簡単ニ其事ヲ處スルヲ得ス

予カ意見ニ據ルニ歳出承認ト租税承認トノ間ニ一定ノ區別アルヘカラス此二者ハ

國ヨリ同一ノモノニ非ス何トナレハ各個ノ租
税ハ一定ノ歳出ニ對シ別々ニ承認セラレタル
モノニアラス即チ政府ノ総收入ハ彼此ノ區別
サル一括シテ國庫ニ之ヲ納レ而シテ此ヨリ各
費目ノ緩急ニ應シ其金額ヲ支出スルモノナレ
ハナリ
今立憲政体ノ主義ニ從ヒ歳出ヲ類別スレハ左
ノ如シ
第一　法律上ノ必要（法律、條約等）ニ起因スル歳出
此歳出ハ議院ニ於テ拒ムヿヲ得ス

第二　皇帝ノ政權ノ施行ニ起因スル歳出
此歳出ハ或ハ必要ナルモノアリ或ハ単ニ有
益ニ止マルモノアリ必要ノ行政經費ハ議院
ニ於テ拒ムヿヲ得ス有益ノ經費ハ之レカ為
メ新税ノ承認ヲ求ムル時ニ限リ議院之ヲ拒
ムヿヲ得
条約ノ施行ニ必要ナル歳出ハ右第一類ニ属ス
故ニ議院ニ於テ之ヲ拒ムヿヲ得ス然レトモ之レ
カ為メ新税ノ承認ヲ求メ得ルヤ否ヤハ一ニ豫
算総体ノ判断ニ由ルモノトス蓋新税承認ノ可

否ヲ決スルニハ豫ニ豫算各費目ヲ審査セサル可ラサルノミナラス又其相互ノ連絡ヲ評定セサル可ラス此関係ニ於テ瓦敦堡ノ憲法ハ其第百十条ニ左ノ明文ヲ掲ケタリ曰ク「凡ソ租税承認ヲ求ムル時ハ之レカ為メ要スル所ノ歳出ノ必要又ハ有益ナルコトニ関シ従前ノ國庫歳出ノ使用方ニ関シ並ニ國庫収入ノ不足ニ関シ精密ノ澄明書ヲ豫メ議院ニ示スヘシ」ト巴威里憲法第七章第四条ニモ亦言ヘルアリ曰ク「國用及國庫総歳入ノ精密ナル計算書ハ之ヲ議院ニ示スヘシ議院ハ其委員ヲシテ之ヲ審査セシメ次ニ其徴収スヘキ租税ヲ本院ノ議ニ付スヘシ」ト」

國庫ノ総歳入ハ文略左ノ如ク類別スルヿヲ得

第一　官有財産ノ收入　政府ノ特有財産（郵便、鐵道等）此歳入ハ議院ノ承認ヲ要セス

第二　既ニ議院ノ議決ヲ経タル租税　此歳入ハ予カ草案ニ於テ猶ホ孛漏生國ニ於ケルコトク別ニ議院ノ承認ヲ要セサルモノトナセリ（巴威里ニ於テハ然ラス）

第三　新税又ハ現行租税増率　此歳入ハ予カ

草案ニ於テ議院ノ承認ヲ要スルモノトナセリ但左ノ場合ニ於テハ此限ニアラス

甲　其租税若シ必要ノ経費ヲ支辨スル為メ缺ノヘカラサルトキ此ニ對スル他ノ資金ヲ得サルトキ

乙　議院開會中ニアラサルトキト議院ヲ招集シ得サル場合トニ生シタル緊急ノ経費

政府若シ有効ノ条約ヲ實施スル為メ壱百万圓ノ新税賦課ヲ求ムルトキハ左ノ場合ヲ考察セスンハアルヘカラス

第一　議院若シ其経費ノ必要ヲ認ムルトキハ之ヲ承認スヘキコト言フ俟タス然レトモ之レカ為メ新税ノ賦課ヲ承認セスシテ唯々其経費支辨ノ為メ他ノ不必要ノ経費ヲ節減スルヿヲ望ムコトアル可シ予ヲ以テ之ヲ見ルニ政府此場合ニ於テ議院ノ意見ニ従ハサルヘカラス

第二　議院ハ条約ニ同意ヲ表セスシテ之ニ

對スル經費ヲ承認セサルコトアルヘシ此場合ニ於テ政府ハ左ノ如ク宣言スルノ權アリトス曰ク条約ハ式ニ依テ締結シ有効ノモノタリ故ニ之ヲ施行セサルヘカラス隨テ議院ハ其施行ニ必要ナル經費ヲ拒ムコトヲ得スト然リ而シテ議院若シ其条約施行ノ為メ必要ナル租税ヲ拒ムトキハ政府ハ議院ノ承認ヲ要セサル他ノ財源ヨリ其金額ヲ得ルカ然ラサレハ豫算ニ掲載セラレタル有益ノ歳出即チ不必要ノ歳出ヲ自由ニ節減シ以テ右条約ノ經費ヲ支辨セサルヘカラス此ニ由テ全國ニ被ラシメタル損害ハ政府其責ニ任セス議院ヲシテ其責ニ當ラシムヘシ

議院若シ豫算案ヲ全廢シ又ハ法律上若クハ事実上必要ノ歳出ヲ支辨スルニ欠クヘカラサル歳入額ヲ承認セサルトキハ政府ハ必要ノ歳出支辨ニ欠クヘカラサル資金ヲ得ンカ為メ議院

ノ承認ナク租稅ヲ徵收スルノ非常權ヲ施行ス
ルモ不可ナルコトナシ
此原則ハ瓦敦堡憲法第百二十四條ニ明言スル
主義ニ起因ス即チ議院ハ誠實ナル審査ヲナシ
テ必要ト認メタル租稅ヲ承認スヘキ義務アリ
ト言ヘル主義是ナリ此主義ハ獨乙ノ國法ニ於
テモ亦公認スル所ノモノナリ但學者ニ由リテ
ハ英佛二國ノ租稅承認ノ原則ヲ獨乙ニ移サン
ト欲スル者アルカ故ニ右ノ主義ヲ充分ニ擴充
スルニ於テ異議ヲ唱フル者アリ

其他政府ト議院トノ間ニ於テ一經費ノ必要不
必要ニ關シテ異議アルトキハ之ヲ裁定スルノ
方法如何トノ問題起ルヘシ
普國ノ憲法ハ此異議ニ對シ法律上之ヲ裁定ス
ルノ條規ヲ設ケス故ニ双方ノ中一方其議ヲ枉
ケサルヘカラス憲法ニ由レハ政府ハ常ニ議院
ノ意見ニ屈服セサルヘカラス何トナレハ政府
ハ議院ノ可決シタル豫算ニ基キテ行政ヲ施行
スヘキモノナレハナリ然レトモ政府若シ其好意
ヲ捨テ議院ノ議決ニ從ハサルトキハ議院ハ事

實上政府ノ意見ニ屈服セサル可ラス

他ノ諸國例ヘハ巴威里亜、瓦敦堡等ノ憲法ニ據ルニ宰相ハ其責任ヲ以テ議院ノ議決ニ違ヘル經費ヲ支出シ得ト雖モ此場合ニ於テ宰相ハ議院ノ告訴ヲ免ル、コトヲ得ス然ルニ從前ノ經驗ニ依ルニ議院、宰相ヲ告訴スルノ權ハ一ノ空文タルニ過キス

予カ草案ニ據ルニ斯ノ如キ爭論ハ内閣總員ノ責任ヲ以テ皇帝ヨリ親裁セラルヘシトナセリ然レトモ予ハ法律上ノ必要不必要ニ關スル問題ハ通常裁判所ニ於テ之ヲ判決シ得トノ意見ニ同意シタリ是レ普國憲法ノ欠典ヲ補足シ且ツ爭論ヲ正當ノ式ニ依テ裁定シ得セシムルノ利益アリ此事ニ關シテ予ハ曩ニ既ニ意見ヲ述ヘタリト信ス

千八百八十八年三月一日　リヨースレル記ス

「有効ノ条約ヲ施行スル為メ必要ノ租税ハ議院ニ於テ之ヲ拒ムコトヲ得ス」ト謂フヲ得ル乎ノ問ニ對シ予ハ謹テ斯ノ如キ原則ハ正當ト認ムルコトヲ得スト答フルノ栄ヲ得タリ

蓋國家ノ支出ハ獨リ租税ヲ以テスルノミナラス又其他ノ収入ハ勿論國債ヲ以テモ之ヲ支辨スルヲ得ヘシ而シテ各個ノ場合ニ在テ如何ナル支辨方法ニ依ル可キ乎ニ至テハ立憲國ニ於テハ政府ト議院ノ間ニ協議ヲ遂ク可キナリ故

ニ条約施行ノ為ノ支出ハ必ス租税ヲ以テス可ク議院ハ之ヲ拒ム可ラスト規定スルヲ得ス止タ此支出ヲ支辨スル為ノ財源ハ之ヲ壅塞ス可ラストノ原則ヲ設クルヲ得ルノミ

然レトモ此原則ヲ以テ國際条約施行ノ為メノ支出ニ止ムヘキノ理由ハ之ヲ發見スルニ苦ム所ニシテ少ナクモ國際条約公法又ハ民法上ノ義務ヨリ生スル総テノ支出ニ延及セシムヘキナリ而シテ独乙各邦中ノ憲法(「ブランシュワイ」憲法第百七十三条「オルデンブルビ」憲法第百八十七条ノ如キ是ナリ)ニ於テハ現ニ斯ノ如キ規定ヲ設クルヲ見ル

然リ而シテ此原則未タ以テ正當ナルモノト謂フヲ得ス何ントナレハ必要ノ支辨財源ヲ承認スヘキ議院ノ義務ハ獨リ前記ノ諸支出ニ関シテ存スルノミナラス又其義務ナキモ議院ニ於テ既ニ承認シタル一切ノ支出ニ及フモノナレハナリ抑モ歳計豫算ノ本然ハ收入支出ノ平均ニ在リ若シ支出ニシテ收入ニ超ユルトキハ新規ノ收入又ハ國債ヲ承認セサル可ラス既ニ收

入支出ノ確定シタル後ニ於テ生スル不足ヲ補
給スル為ノ必要ナル財源ヲ拒ム所ノ議院ハ其
義務ニ背反シタルモノトス何トナレハ議院ノ
義務ハ其条件ヲ以テ完全ナル豫算ヲ調製スル
ニ在ルモノニシテ平均ヲ失スル豫算ハ其意義
上未タ完全ノモノニ非サレハナリ
案遡憲法第九十七条ニ於ケルカ如ク收支平均
スヘキノ原則ヲ憲法ニ明揭スルハ賛成ヲ表シ
難シ何トナレハ此原則ハ一方ニ於テハ言フ俟
タスシテ判然明白ナルノミナラス又一方ニ於

テハ實際上毫モ功用ナキモノナレハナリ蓋既
ニ確定スル歳入又ハ現ニ確定シタル支出ヲ支辨
スヘキ手ニ至テハ未タ曾テ爭議ヲ生シタル事
ナク而シテ豫算上ノ爭議ハ毎常支出ト其支辨
方法トニ関スルモノニシテ之ヲ要スルニ爭
議ノ点ハ凡ソ支出ヲ支辨スヘキ手ニ在ラスシ
テ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ支辨スヘキ手ニ在
ルナリ然レトモ此原則ニ依リ決シテ斯ノ如キ
爭議ヲ終結セシムルヲ得ス今一例ヲ挙ケテ之
ヲ證セン政府新税ヲ興シテ不足ヲ補給セン

ト欲スル場合ニ於テ議院若シ官有財産ヲ賣却シ又ハ國債ヲ募集シ又ハ手數料ヲ新設シ又ハ政府ノ提出シタルヨリ他ノ租稅ヲ興スノ決議若シハ建議ヲ為サントス欲スルモ之ヲ制止スルコト能ハサルヘシ故ニ此ノ原則ハ止タ實効ニ乏シキ純粹ノ学理ヲ明言スルニ過キサルノミ」

蓋收入ヲ踰エル所ノ支出ヲ支辨スル方法ニ関シ政府ト議院ノ間ニ生スル爭議ハ豫ノ之ヲ制止セントスルモ能フヘカラサル事トス然レトモ(甲)支出ノ承認ハ議院ノ好意ニ出ツヘキモノニ非ス一定ノ支出ハ毎年ノ承認ヲ要セサル欵又ハ少ナクモ之ヲ拒ムコト能ハサルノ原則ト

(乙)議院ノ承認ヲ要スルモノヲ以テ新規ノ收入ニ限リ既ニ法律上現存スル所ノ收入ハ豫算ニ関セス之ヲ徴收スルノ原則(此両原則ニ関シテハ予既ニ詳細ノ意見ヲ述ヘタリ)ニシテ確立スルトキハ政府ハ決シテ必要ノ支出殊ニ今茲ニ問題タル条約施行ノ支出ヲ支辨スルニ缺クヘカラサル財源ヲ求ムルノ道ヲ失フニ至ル恐レナカルヘキナリ

其他問題ノ原則ト離レサル所ノ弊害ハ一定ノ祖税ハ単ニ一定ノ支出ヲ支辨スル為ノ費用ヘキ乎ノ觀察ニ因テ原則ヲ立テタルコト是レナリ

然レトモ此所謂ル定用祖税ノ財政上賛成スヘカラサルモノタルハサナクモ歐洲大陸ノ財政学ニ於テハ確定不動ノ説ニシテ立憲制國ニ在テ政府ノ權力ヲ强大ナラシムルノ障碍タル固ヨリ明ナリトス何トナレハ此レ收入ノ支用ニ関シ政府ヲ検束スレハナリ

問

一 普國憲法第六十三條危急命令ノ場合ハ之ヲ財政ニモ適用スヘキ乎

二 若之ヲ財政ニモ適用スヘシトセハ今國家ノ危難ヲ避ル為ニ政府ハ命令ヲ以テ國債ヲ募リタルコトアリト假定セシニ其事後承認ヲ求ムルニ當テ若シ國会之ヲ承認スルヿヲ拒ムヿアラハ如何ナル結果ヲ生スヘキヤ國債ハ未来ノ約束ナリ而シテ國会ノ承認拒否ハ縱令過去ニ命令ノ効力ヲ取消スヿ能ハスト

金を未来に向テハ十分ニ其消極結果アラシメサルヘカラス果シテ然ラハ國債ノ命令ニシテ承認ヲ拒否セラルヽアラハ政府ハ何等ノ責任ヲ以テ之ヲ終局スルヿヲ得ヘキヤ

答

第一章國ニ於テ憲法第六十三条ヲ財政ノ事ニ関スル緊急令ニ適用スルハ固ヨリ之ヲ禁セス例ヘハ「ウエルテンベルグ」ニ於テ國王ハ憲法第八十九条ノ甚タ普通ナル規定ニ基キ緊急ノ場合ニ於テ國安維持ノ為メ必要ノ處置ヲ為スヿヲ得而シテ其緊急令ヲ以テ仮リニ租税ヲ徴収シ又ハ國債ヲ募集シ得ルヤ疑ヒナシトス是レ「サルバイ」氏ノ「ウエルテンベルグ」國法論第二巻第五百十五葉及第五百五十一葉ニ於テ明カニ認ムル所ナリ

索遜國ニ於テハ憲法第八十八条ニ從ヒ緊急令ヨリ取除クモノハ唯憲法及撰挙法ノ変改ニアルノミ然レトモ索遜國王ハ其他又憲法第百五十五条ニ依リ(現今ハ千八百五十一年ノ法律第八条ニ依リ)非常ノ場合及豫知スヘカラサル緊急

ノ場合ニ於テ財政上ノ處分ヲ為スノ權アリ而シテ租稅ノ徵收若クハ國債ノ募集ハ固ヨリ其所分中ニ屬スルモノトス(「ヲビッー」氏索遜國法論第二卷第百二十七葉)「バイエルン」國憲法ハ緊急合普布ノ權ニ關シテ別ニ明条ヲ掲ケス同國ノ警察處罰規則第三十八条ニ掲ケタル緊急合普布ノ權ハ專ラ警察合ニ關スルノミ之ニ反シテ同國ノ憲法ハ財政上ノ仮處分ニ關シテ特別ノ規定ヲ掲ケタリ即チ同國憲法第七章第十三条ニ依レハ非常緊急ノ場合ニ於テ其急ヲ救フ

カ為メ資金ノ徵收ヲ必要トスルトキハ議院ノ仮承認即チ議院総代ノ承認ヲ経テ國債ヲ募集スルコトヲ得但シ仮リニ租稅ヲ徵收スルハ「ハイヘルン」國ニ於テ之ヲ許サス隨テ非常ノ需用アルニ當リ政府ハ議員ヲ招集シ其臨時ニ賦課スル租稅ノ承認ヲ求メサルヘカラス此時ニ当リ政府ニ於テ其臨時課稅ノ必要ヲ證明シタル時ハ議院ハ必ス之ヲ承認セサルヘカラス何トナレハ租稅ヲ隨意ニ拒ムノ權利ハ「バイエルン」國ニ於テモ亦公認セサレハナリ

孛國ニ於テハ憲法第六十三条ニ依リ凡ソ憲法ニ矛盾スル緊急令ハ其發布ヲ明カニ禁ズ今此憲法ニ矛盾スルモノトハ何ヲ指スヤト云フニ第一ニ憲法自己ノ条則(雲遜國ニ於ルカ如ク亦然リ)第二ニ立法ノ式ニ依ルヘキ憲法上ノ原則(例ヘハ出版ノ自由裁判權ノ独立等ノ如シ)第三ニ憲法ニ於テ明カニ議院ノ事前ノ承認ヲ要スト定メタル事件(例ヘハ憲法第九十四条第九十五条及第百七条ノ如シ)ヲ謂フナリ然ルニ孛國ニ於テ憲法第六十三条ヲ左ノ如ク解釈スルモノアリ即チ憲法ニ於テハ法律ヲ以テ定ムヘシト明記シタル事件例ヘハ租税徴收國債募集ノ如キハ緊急令ヲ以テ之ヲ定ムルヲ許サスト解釈スルモノアリ(例ヘハ第百三条ノ如シ「リヨンヲ」氏孛國國法論第一巻第九十一条)然レ氏ヲヲ以テ之ヲ觀ルニ此解釈ハ其当ヲ得タリト云ヘカラス何トナレハ緊急令ハ一ノ仮定法律ニシテ法律ノ効力ヲ有スヘキモノナレハナリ且ツ其解釈ニ從フ氏ハ孛國政府ハ緊急ノ場合ニ臨シ施ヘテ財政上ノ處分ヲ為シ得サレハナリ果シ

テ然ルトキハ独逸國法ノ原則第二國家ノ正当ナル利益ヲ破壊スルカ故ニ豫算超過若クハ豫算外ノ経費支出ノ意義ヲ拡張セサルヲ得サルニ至ルヘシ

故ニ予ハ政府ハ緊急令發布ノ普通權利ニ基キ又ハ憲法中他ノ条則ニ基キ緊急ノ場合ニ於テ相当ノ財政處分ヲ為スノ權利ヲ有セサルヘカラスト信ス予ハ予カ憲法草案ニ於テ索逸バイエルンノ例ニ從ヒ財政ノ緊急ノ處分ニ對シ特別ノ規定ヲ設クルヲ以テ安全ナリト豫定シ置タリ是レ畢竟財政上ノ處分ハ実施後之ヲ旧ニ復スルコト能ハサルモノナレハナリ

第二、政府若シ憲法ノ範圍内ニ於テ非常ノ國用ヲ支弁スル為メ行政令ヲ以テ國債ヲ募集シ而シテ議院其ノ事後ノ承認ヲ拒ムトキハ予カ意見ニ於テハ内閣総員連署シテ其事件ヲ皇帝ニ奏聞シ勅裁ヲ仰クヘキモノトス皇帝若シ國債ノ必要ヲ裁可セラレタルトキハ議院ノ不承認ハ憲法ニ背クモノトナリ是ニ於テ議院ノ憲法上ノ決議ヲ無効トシ政府之ヲ遵守セサルノ原則ヲ

適用スヘシ故ニ其國債ノ利子支拂及元金償還ニ必用ナル金額ハ之ヲ豫算ニ載セ法律上必要ノ歳出支辨ノ原則ニ從テ之ヲ處置スヘシ

予ハ予カ憲法草案ニ於テ憲法ニ背反スル議院ノ決議ヲ無効トスル明条ヲ掲ケタリ其条ハ斯ル紛議ノ起ル場合ニ對シ特ニ必要ナルモノトス

緊急令ハ議院之ヲ否決スルモ其効力ヲ失ハストノ意見ハ予カ同意スル所ナリ論者若シ此意見ニ同意スルトキハ政府ハ緊急令ノ廢止若クハ議院ノ否決ヲ公布スルヲ要セス此場合ニ於テ緊急令ハ依然其効力ヲ有スルカ故ニ之ニ基キタル國債ハ依然政府ノ義務トシテ存スヘシ

然レトモ議院ノ否決ニ依リ緊急令自然ニ其効力ヲ失フモノトスルトキハ緊急令ノ有効無効ハ主トシテ議院ノ決議ノ有効無効ニ依テ定マルモノナリ議院ノ決議若シ憲法ニ背反スルトキハ即チ無効トナリテ別ニ法律上ノ効力ヲ有セス故ニ此場合ニ於テモ緊急令及國債ハ其儘施行セラレ得ルモノトス

議院ニシテ若シ其承認ヲ拒ムノ自由權ヲ有スルトキハ國債ハ國家ニ對シ法律上ノ義務ヲ負ハサルモノトナリ宰相其ノ一身ヲ以テ責ニ當ルヿトナルヘシ然ルニ其責任ハ宰相ヲ告訴スルノ制規ナキ國ニ於テ別ニ効力ヲ有セス宰相ニ對スル民事訴訟モ亦別段ノ法律ナキ以上ハ之ヲ行フニ由ナシ何トナレハ民事裁判所ハ宰相ノ職務ニ關シ及式ニ依テ發布セラレタル命令ノ効力ニ關シ判決ヲ下スノ權利ナキモノナレハナリ故ニ議院若シ國債ノ利子支拂及元金ノ償還ニ必用ナル金額ヲ拒ムトキハ政府ハ此金額ヲ事實上欠クヘカラサル(即チ政府ノ信用ヲ維持スル為メ欠クヘカラサル)歳出トシテ政府ノ自由ニ處分シ得ル自餘ノ収入金ヨリ支辯スルノ權アリトス而シテ万止ムヲ得サルノ場合ニ於テハ其專斷ヲ以テ租稅ヲ徴収スルモ不可ナルヿナシ但シ此場合ニ於テ政府ハ議院ニ向テ「インデムニチ」ヲ求メ得ルモノトス

之ヲ要スルニ本件ニ關シテハ二種ノ意見アリ

第一 予カ憲法草案及独乙國法論ニ從ヘハ議

院ハ無論承認ヲ与ヘサルヘカラス承認ヲ拒メル議院ノ議決ハ無効タリ國債ハ依然法律上ノ効力ヲ有シ其利子支拂及元金償還ハ法律上必要ノ歳出ニ属ス

第二次對論者ノ意見ニ從ヘハ議院ハ承認ヲ拒ムヲ得ヘシ議院ノ決議ハ國債ヲ法律上無効ニ為スヲ得ヘシ但シ議院ハ「インデムニチ」ヲ与フルヲ得ヘシ此場合ニ於テハ第一ノ場合ニ同シキ結果ヲ生ス或ハ又議院其「インデムニチ」ヲ拒ムヲ得ヘシ此場合ニ於テ國債ハ事実上政府ノ義務トシテ止マルヘシ蓋民法上本人(プリンシポール)及代理人間ノ関係ハ政府ト議院トノ関係ニ適用スヘカラサルモノナリ故ニ國家ノ利益ノ為シメル歳出ハ事実上國家ニ属シテ離レサルモノトス

千八百八十八年三月三日　ロエスレル記

問

一 普國憲法第六十三條危急命令ノ場合ハ之ヲ財政ニモ適用スヘキヤ

二 若之ヲ財政ニモ適用スヘシトセハ今國家ノ危難ヲ避ル為ニ政府ハ命令ヲ以テ國債ヲ募リタルコトアリトス假定センニ其ノ事後承認ヲ求ムルニ当テ若國会之ヲ承認スルヿヲ拒ムヿアラハ如何ナル結果ヲ生スヘキヤ國債ハ未来ノ約束ナリ而シテ國会ノ承認拒否ハ從令過去ニ命令ノ効力ヲ取消スヿ能ハスト

金未美ニ向テハ十分ニ其ノ消極結果アラシメサルヘカラス果シテ然ラハ國債ノ命令ニシテ承認ヲ拒否セラルヽアラハ政府ハ何等ノ責任ヲ以テ之ヲ終局スルヿヲ得ヘキヤ

明治二十一年三月一日　井上

ロエスレル氏
モッセ氏
貴下

孝國憲法第六十三條ニ關スル問ニ對シ予ハ左ノ意見ヲ述フルノ榮ヲ得タリ

(一)　第一ノ問ニ對シテハ予ハ孝國憲法ニ依リ否ヲ以テ答ヘサルヲ得ス蓋此問ハ新稅歲計豫算ノ確定國債國家ノ負擔トナル保證ニ關スルナルヘシ而シテ孝國憲法ハ總テ此等ノ場合ニ於テ立法ノ手續ニ準據ス可キコトヲ明言シ第百條第百二條第百三條ノ如キハ「單ニナル諾ヲ以テ更ニ其疑義ナカラシム抑憲法ニ於テ立法ノ手續ヲ明揭スル何レノ場合ニ在テモ一般ニ

第六十三条ノ危急命令ヲ適用スルヲ許サスト主張セサルヘカラス而シテ是レ憲法制定ノ沿革及精神ヨリシテ然ルモノトス又財政上ノ處置ニ関スル法律トハ止タ形式上ノ意義ニ於テノミ斯ク謂フヲ得可ク元来其精神ハ政府ハ議院ノ承認アルニ非サレハ財政上ノ處置ヲ行フヲ得ストノ意ヲ表示スルニ過キサルコトヲ考察セサル可ラス然リ而シテ帝國憲法ハ危急ノ場合ニ関シ一モ例外ヲ設ルコトナシ其他又財政上ノ處置ニ在テハ決シテ第六十三条ニ於テルカ如キ緊急ノ必要ヲ生スルモノニ非スト主張スルヲ得ヘク之ヲ詳言スレハ議院ノ承認ヲ受ケスシテ新税ヲ興シ若クハ國債ヲ募集スルニ非サレハ公共ノ安寧ヲ維持シ若クハ非常ノ危難ヲ芟除スルヲ得サルノ場合ハ絶テコレアルコトナク事若シ議院閉會中ニ際スルトキハ宜シクヨロシク之ヲ召集スヘク其間既ニ現存スル財源ヲ以テ危急ノ場合ニ於テ最モ緊急ナル需用ニ供スルニ足ルヘキナリ

以上論述シタル主義ハ帝國國法ニ関シ有名ナ

ル著述家リヨンヲシユルチユ「ヘルドマイエル」ノ擧ケテ主張スル所ニシテ數多ノ独逸大學法學科ニ於テ講義スル者ノ異説ナキ所ナリ又學國政府未ダ曾テ反對ノ主義ヲ認可シタル例ナキノミナラス彼ノ困難ヲ極メタル憲法爭議ノ時ニ於テモ第六十三條ノ命令ヲ以テ財政ニ関スル議院ノ憲法上叅與ヲ規避セント試ミタルコトナキニ非ラスヤ

然レトモ陳腐ニ属スルニ三ノ独乙各邦憲法ハ學國ニ反シ國債ニ関シ必要ナル議院ノ事前承認ニ例外タル立テ殊ニ學逐憲法第百五條ニ於テハ左ノ如キ規定アリ

豪族会議ノ承認アルニ非サレハ有効ニ國債ヲ募集スルヲ得ス

豪族会議ノ承認アルヲ要スルモ非常ノ緊急ナル豫期スヘカラサル場合ニ於テ迅速ナル財政上處分ヲ要スルトキハ臨時ニ豪族会議員ヲ召集スヘシ

然レトモ外部ノ状況ニ依リ到底会議員ヲ召集スルコト能ハサルトキハ國王ハ其事ヲ奏上シ

タル各省大臣ノ責任ヲ以テ非常ノ需用ヲ達スル為メ欠クヘカラサル臨時處分ヲ命スルヲ得又必要ノ場合ニ於テハ特ニ國債ヲ募集スルヲ得ルモ可及的速ニ遅クモ次回ノ通常會議ニ其處分ヲ提出シテ憲法上ノ承認ヲ受ケ又其必要ナリシ金額ノ支用ヲ證明スヘシ

千八百五十一年五月五日ノ法律ハ前記第三項ノ規定中國債ヲ付シタルモノヲ左ノ如ク修正シ以テ猶一層國王ノ權利ヲ擴張シタリ

「然レトモ状況ニ依リ到底遅延ナク議員ヲ召集スルコト能ハサルカ又ハ議員參会スル能ハサルトキ云」

「セルビー」憲法第六十六条ハ孛遜同一ノ規定ヲ設ケタリ但國債ノ最高額ヲ限定セリ(即二十万「ツカート」凡ソ二百三十五万「フラン」)

又巴威尔憲法第七章第十五条ニ於テモ危急ノ場合ニ関スル處分ヲ定メ即緊急ナル外部ノ危難ニ際シ資金ノ借用ヲ要スルモ外部ノ状況ニ依リ議員ヲ召集スルコト能ハサルトキハ常置委員(憲法第七章第十四条ニ依リ各院ヨリ委員

一名ヲ撰定シ國債償却委員ト為シタルモノ是レナリ）ハ議院ノ名義ヲ以テ臨時國債ノ承認ヲ与フルヲ得ルコトトナセリ

議院ニ常置委員ノ制ヲ設ケタル憲法ニハ委員ノ承認ヲ以テ危急法律ノ手續ニ依リ國債ノ募集ヲ許シタルモノアリト雖其最高額ヲ限定ス例ヘハ「プラウシヤ」憲法第百八十七条第百九十条ノ如キ是レナリ

此ニ反シ瑞典憲法（第六十三条）ハ準備金ノ儲蓄法ヲ定メ國王ハ一定ノ要件ニ從ヒ之ヲ處分スルヲ得ル事トス

蓋準備金ノ制ヲ講究スルハ本顕ニ非ス又數年来ノ経驗ニ徴シ有効ナル孝國ノ制ハ固ヨリ一般普通ニ適用ス可キモノト見做スヿ能ハスト雖モ予ハ危急ノ場合ニ於テ政府ハ議院ノ承認ヲ待ケスシテ國債ヲ募集シ得ルノ規定ヲ勸告スルヲ欲セス此問題ハ止タ戦争ノ際ニ於テ実用アルニ過キスト認ムル而シテ之ヲ実験ニ徴スルニ戦時ニ在テハ人民ノ感覚大ニ激動シ議院ハ必ス自國防禦ノ為メ要スル所ノ財源ヲ承認スヘ

ク此時ニ方テ之ヲ召集スルトキハ反テ政府ノ勢力ヲ強大ナラシムヘシ又他ノ一方ヨリ見ルモ國庫ハ議院召集ノ期ヲ待テ國債ヲ募集スルノ餘裕ナキモノニ非ス若シ又真ニ危急存亡ノ時ニ際シ議院ヲ召集スル能ハサルトキハ固ヨリ國家ノ安全ヲ犧牲ニ供スルノ故ナキヲ以テ独リ議院ノ財政權ニ止マラス懇テ憲法上ノ制限ヲ顧ミス政府ハ一身ニ責任ヲ負擔シテ事ヲ處シ他日責任解除ヲ求ムヘク而シテ斯ノ如キ非常ノ場合ヲ慮リテ豫メ設ケタル所ノ規定ハ

必ス濫用ナキヲ期シ難カルヘキナリ然レトモ政府ノ信用ヲ維持セントスルトキハ凡ソ新規ノ負債ヲ興シ以テ國家ニ負擔ヲ被ラシムルニハ特例ヲ用ヰス必ス豫メ議院ノ承認ヲ要スルノ緊要アリトス然リ而シテ大國ノ憲法ニ於テ一モ此主義ニ例外ヲ許シタルモノナシ

二　第一問ニ對シ否ヲ以テ答ヘタルニ於テハ既ニ第二問ノ答ヲ結了シタルハ固ヨリナリトス雖モ第二問ハ以下ニ論述スルカ如ク若シ所謂危急國債ヲ許ストキハ如何ナル弊害ヲ生スル

ヲ明白ナラシムルヲ以テ尤有益ナリトス蓋
貴衆ニ於テ議院事後ノ承認ヲ拒ムモ最初ヨリ
法學上ノ語ヲ用テ之ヲ「エキス、ツンク」ノ意ト云
フ危急命令ノ効力ヲ廢スルモノニ非ス単ニ將
来ニ向テ其効力ヲ止ムルニ過キスト謂ハレタ
ルハ実ニ正當ノ言ナリトス然リ而シテ命令ハ
之ヲ廢スル迄施行セラレタルヲ以テ総テ此ニ
ヨリ生シタル權利上ノ関係ハ後日ノ廢止ニ依
リ其効力ヲ左右セラルヽモノニ非ストハ予ノ
聞知スル所ニ於テハ國法學者一般ノ定説ナル

ノミナラス又國家活動ノ需求ニ適スルハ獨リ
此主義ニ限ルコト証スヘカラサルナリ今ヤ此
主義ヲ危急命令ヲ以テスル國債ノ場合ニ適用
スルトキハ則左ノ結果ヲ來スヘシ
甲 財務部ニ國債募集ノ權ヲ與フル所ノ命令
ヲ廢シタル後ハ其未タ実行セサル國債ハ此時
ヨリ之ヲ募集スルヲ得ス
乙 然レトモ命令廢止前ニ於テ既ニ募集シタ
ル國債ハ其効力ヲ有スル然リ而シテ政府其命令
ニ從ヒ既ニ債主ト取結ヒタル借金契約ハ債主

ヨリ金銭ヲ交付シタルト否トヲ問ハス命令ノ
廢止ニ依テ其効力ヲ失フモノニ非ス法人即國
庫ノ資格ニ於ケル政府ハ記債契約ニ從ヒ民法
上ノ責任ヲ有スルモノナレハ契約取結後ニ在
ル所ノ命令廢止ノ爲メ此責任ヲ免カルヽコト
ヲ得ス
若シ夫レ危急命令ヲ以テスル國債ヲ許スニ於
テハ如何ナル弊害ヲ生スヘキヤハ前記ノ結果
(予ハ之ヲ法學上疑義ナキモノト認ム)ヨリシテ
判然セリ蓋議院ノ事後承認此際殆ト其功用
ナキニ近シ何トナレハ通例既ニ被ムリタル政
府ノ財政上負擔ハ此時ニ方テ之ヲ取消スヲ得
ス又大臣ノ責任ハ以テ之ヲ防制スルニ足ル方
便ニ非レハナリ
然レトモ事後ノ承認ヲ拒ム場合ニ於テ記債契
約ヲ無効ニ歸スヘキ規定ヲ設ケント欲スルト
キハ(ゲルベル氏ハ索隆憲法ノ此事ニ関スル規
定ヲ斯ノ如ク解釋ス)危急國債ヲ募集スル政
府ノ權ハ全ク價直ナキモノトス何トナレハ斯
ノ如キ約束ヲ以テ或或巨大ナル資金ヲ政府ニ貸

付スル債主ハ決シテ
ツレナケレハナリ
モツセ再拝